

C E L

Culture,
Energy
&
Life

vol.
112

March 2016

特集 | 昔の | 暮らしの | 力

Special Feature
The
Power
of
Traditional
Life





江戸時代の庶民の暮らし
ぶりが描かれた『雲煙過
眼帖（うんえんかがんち
う）』より（御手遊木偶所）
松川半山筆、19世紀、所蔵／大阪
歴史博物館

特集



昔の暮らし力

Special Feature The Power of Traditional Life

変化のスピードは年々早くなり、より短期的なものを見ることが多くなってきた。短期的な効率を優先すること自体は悪いことではないのだが、そのような傾向のみに拍車がかかることには違和感を覚える人も多いだろう。ここで、一度立ち止まって考えてみたい。日本には、長い期間にわたって継承し、発展させてきた固有の生活文化や暮らしがある。これらは未来に継いでいくべき貴重な財産である。本号では、昔ながらの暮らしを見つめ直すことで、「これからの暮らし」を考える。昔に学ぶことで、よりよい暮らしを実現するための智恵を探っていこう。

その1／老舗から学ぶ
時代を超えて、
未来を拓く

対談
鈴鹿 可奈子+小西池 透

Page
2

その2／能楽から学ぶ

能楽における
技能継承と
人材育成について

西尾 久美子

Page
10

その3／町並みに学ぶ

見て、聞いて、
触って楽しむ、
住まいと暮らしの
博物館

Page
16

その4／心学に学ぶ

1. 論考／心学の教え
「儉約」とは何か

石田梅岩の思想と行動
高野 秀晴

Page
22

その4／心学に学ぶ

2. 事例／今日の活動

心学の
いまを訪ねる

Page
26

表紙／「大阪くらしの今昔館」内に設けられた人形屋では、壁一面にお面が並ぶ。



裏表紙や記事内各所に配された印は、本号特集テーマにあわせ、「暮」の文字を象徴的にデザインしたものです。

特集

昔の暮らし力

Special Feature
The Power of Traditional Life

Page
30

その5／路地に学ぶ

〈会館〉という迷宮

京都の集合建築に
学ぶ都市の奥ゆき
加藤 政洋

その6／井原西鶴に学ぶ
大阪商人の生活力

西鶴の教訓
中嶋 隆

Page
36

Column & Essay

衣食住遊 大河ドラマ『真田丸』と時代考証
日の国ニッポンの理 備えるための端午の節供

丸島 和洋 42
井戸 理恵子

CEL Insight

CEL Output Part 1 米国イノベーション地域におけるイノベーション・サポート・システムの特徴とその変化（後編）
CEL Output Part 2 未来への記憶を共有する
生活者の意識を探る 第二回 幸せな地域・成熟社会
CELからのメッセージ 昔の学びを未来につなげる

奥田 浩二 44
弘本 由香里 48
豊田 尚吾 52
小西池 透 56



こにしけとおる／大阪ガス入社後、マーケティング部門での家庭用営業や人事部・企画部でのスタッフを担当。その後、財界活動スタッフ等を経て、東京支社長、広報部長を歴任し、2015年より現職。

小西池 透
Konishiike Tooru

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所
所長



Special Feature

The Power of Traditional Life Part 1



(株)聖護院ハッ橋
総本店
専務取締役

鈴鹿 可奈子
Suzuka Kanako

すずか・かなこ／京都大学経済学部経済学科卒業。信用調査会社勤務を経て、2006年聖護院ハッ橋総本店に入社。2011年には新しい形でハッ橋を提供する新ブランド「nikiniki(ニキニキ)」を立ち上げる。2012年より現職。



対談

今日、企業を取り巻く状況は変化し、多くの企業が対応に苦慮している。そのようななか、いくつもの時代を超えて、事業を継承し続けている企業がある。それが「老舗」企業だ。老舗企業は、100年200年と事業を継続し、今日も独自の価値をお客様に提供し続けている。

長く続く企業はどのように時代を拓いてきたのか。京都の老舗企業にその「秘訣」を尋ねた。

撮影／宮村 政徳

往時の聖護院ハッ橋総本店店頭(昭和中期頃)。

味は伝統

小西池 御社は元禄2年（1689年）に創業し、327年の歴史をお持ちです。現在、後継者として経営に携わっておりますが、まず、御社の沿革や事業内容からお話いただけますでしょうか。

鈴鹿 当社は、元禄2年に、聖護院の地、現在の本店の場所にて、スタートしました。八橋^{やっせけんきょう}検校^{けんぎょう}さんというお箏^{おしょう}の名手が葬られたお墓が黒谷^{くろや}の金戒光^{こんかいこう}明寺^{みょうじ}にあり、そのお墓を訪れる人たちに、何か検校さんにちなんだ特別なものを出不いか、ということが生まれたのが、琴の形に似せた焼菓子である「ハッ橋」です。以来、ハッ橋の製造と販売ひとすじに携わってまいりました。

小西池 続けるというのは難しいことだと思います。これまでお店の経営を続けるにあたって、大切にしてこれたことは何でしょうか？

鈴鹿 「おいしい」に対するこだわりでしょうか。お客様がおいしいと思うお菓子を提供し続けることが大事だと考えています。当社の経営理念は「味は伝統」ですが、その根幹は、どんな時代においても、一番おいしいハッ橋を作り続けるということ。元禄時代に創業した老舗のお菓子というところと「当時

と同じ味？」と思われる方もおられるかもしれませんが、おそらくそうではないでしょう。江戸時代と今では人の味覚が変わるので、当時おいしいものが今もおいしいとは限りません。こうした緩やかな嗜好の変化のなか、お客様の「おいしい」と思われる気持ちが変わらないように常に切磋琢磨^{せつさくさくさ}するという気持ちで、「味は伝統」には込められているのです。

小西池 緩やかな変化というのは捕まえるのが難しいですね。常日頃からの意識が重要だと思いますが、どのような点に留意しておりますか？

鈴鹿 たとえば、新商品開発の際、社長は必ず「この商品は最低100年は続きますか」と問いかけます。お菓子なのでおいしいものをつくるのは当たり前ですが、流行を追ったり焦ったりすると、どうしても妥協をしてしまうことがある。そんななか、100年は続くかというのを問いかけることで、お客様が普遍的においしいと思うものを本当につくっているかということを再確認するようにしています。

続ける工夫

100年
続けるために
「変える」

小西池 京都の老舗企業では利益は後からついてくるもの、すなわち、お客

様に良いものを提供し、満足してもらえれば利益は後からついてくる、という考え方があると聞いています。「先義後利」というのでしょうか。御社もそのようなお考えで経営を行っておりますのでしょうか。

鈴鹿 企業ですから、従業員の生活もありますし、当然利益は大切です。ただ、最終目標は何かというと、単に5年後10年後どうしているかではなく、100年以上経ってもハッ橋が存在していて、それを口にする方々が笑顔になつてくださること、そしてハッ橋に携わる私たちが、皆笑顔で暮らしていること。目先の利益目標をゴールに設定するのではなく、それだけ先の未来のことを考えるというのが、そう捉えられるのかもしれない。

小西池 100年スパンで物事を見るということですね。

鈴鹿 そうですね。ただ、続けるということだけに固執してしまうと身動きがとれなくなります。当然、100年先のことは誰にもわかりませんが、その未来のために私たちができることは、とにかく日々真面目に商品と向き合っていくということです。毎日「一番おいしいハッ橋を」という想いを持ち続けることが、100年後にも自然と繋がっていく一番の方法ではないでしょうか。

また、原材料について、たとえば米粉は「どこの県のものという種類か」と

小西池 ある調査によれば、京都を訪れる観光客のほとんど（96%）がお土産を買い、そのうちの約半数（45・6%）がハッ橋を購入されると以前聞いたことがあります。

鈴鹿 昔は、ほとんどの観光客のお客様にハッ橋をお求めいただいていたと聞きます。この5年くらいの間でも、

大正15(1926)年頃の
工場内での箱詰め作業。
丁寧な作業は昔も今も変わらない。

お土産が多様化しているのは感じます。さらに昔は地元のお客様にも多く召し上がっていたのですが、最近では減ってきました。とお聞きしますが、普段、ハッ橋は召し上がりますか？

小西池 もちろん、食べたことはあります。ただ、普段から食べているかというと、そうではないですね。

鈴鹿 そうですよ。地元の方から通っていたいているご年配の方々をのぞいて、ほとんどの方がそうおっしゃるのです。

尋ねられることがあるのですが、そうした限定はしていません。固定はせず、毎年、ハッ橋に最も適したお米のブランドを吟味し、使用しています。もし〇〇産とうたってしまえば、特定の原材料が不作の時などに、味を落としてしまうことになりかねません。こうしたことも、100年先を見据えていると言えるのかもしれないですね。

さらに、続いていくための企業の商いのしかたを社長はよく「ちようちん経営」と呼んでいます。目先の利益を考えると、どうしてもコスト削減をし、最低限の運営資金を目指してしまう。これも大切なことですが、私たちはまず、お付き合いを大事にして、少し余白を持たせておく。この余白があると、本当に苦しいときにもまだ削減できる幅があるといった、いわば伸び縮みができる柔軟性を保てます。まるでちようちんのように、膨らませたり畳んだりすることができるので、何かどうしようもない外的要因に出くわしても、破裂することがない。こうした余白や

写真右／あん入り生ハッ橋「聖」の
にき（手前）と抹茶。
左／聖護院ハッ橋。



小西池 お土産については、購入する観光客も変わってきていますね。中国の方とか海外からの観光客も増えて、ずいぶんグローバル化してきました。何か具体的な対応はしていますか？

鈴鹿 海外向けの商品開発というのは、あえてしていません。ただ、既存の商品の組み合わせを変えることなどは行っています。たとえば、中国の方には抹茶や黒ゴマの聖（あん入り生ハッ橋）が人気なので、この2つの商品の詰め合わせを作ったり、空港では抹茶の聖を重点的に販売したりといったことです。しかし、説明書きや包装紙を中国語や英語にすることはしません。考えてみれば、私たちが海外に行って日本語が書かれたパッケージのお菓子を、お土産としてはあまり選びませんよね。もちろん、外国の方向けに味そのものを変えるということも行っていない。

小西池 老舗企業として、変えるところと変えないところを明確に区別して

小西池 御社の長い経営の歴史は、決して平坦な道ではなく、会社をゆるがすような危機的な状況もあったのではないかと思います。経営に携われるなかで、危機への対応などについてはどのようにお考えでしょうか。

鈴鹿 私は、まだ入社して10年ということもあり、大きな危機というものは、直接経験していませんが、会社としては戦争を含め、過去にいろいろな経験をしています。それらを乗り越えてき

「変えるもの」と
「変えないもの」

新しい お客様への 対応

しかし、今は、洋菓子のお土産も増えています。このなかでハッ橋をどのようにして、お客様に選り続けていただくかが課題です。

特集／昔の暮らし方



おられるということですね。新しいお客様という切り口に関連してお聞きしますが、新しく **nikiniki**（ニキニキ）というブランドを立ち上げておられます。これについて少しお話しただけですでしょうか。

新ブランド **nikiniki** の展開

専門性を
突き抜ける

鈴鹿 **nikiniki** は、2011年に立ち上げました。地元の方、特に若い方にハッ橋を知っていただき、選んでもらいたいという想いで始めたのです。学生時代、友人にハッ橋をあげると、他府県出身の友人はよく知っているのに対し、京都で育った友人からは「初めて食べた」といわれることがありました。しかし、食べてもらうと、たいていはハッ橋はおいしいといってもらえるようになる。そうになると、私自身、子どもの頃から日常的に口にしていた大好きなお菓子ですし、どうにかして、ハッ橋を食べたことのない多くの方々に食べていただくきっかけができないか、と考えるようになったのです。

そうしたなか、商品の開発に取り組んだのですが、結局、自分でも食べたハッ橋を作ろうというのがすべての原点になっています。

Suzuka Kaneko

「私が好きだから
食べてみて!」と
いえるものだけを
形にするように
しています。

たとえば、小学生の頃、母はハッ橋や生ハッ橋を使ったデザートをお出しするカフェをプロデュースしていました。当時、リングのコンフィと合わせたなど、さまざまなハッ橋の可能性を試したお菓子が実においしく、「また食べたい」「あの味を再現したい」と思いました。さらには、きれいな色やハート型の生ハッ橋があったら良いなと幼い頃から絵に描いたりしていましたし、それらが具体的に実現したのが **nikiniki** なのかもしれません。

ただし、ここで使用するハッ橋と生ハッ橋はすべて、聖護院ハッ橋総本店と同じものです。米粉と砂糖を混ぜ合

わせ、ニッキで風味づけをするというハッ橋の基本を守って作られている、聖護院の商品をそのままの配合で使用しているのです。

小西池 **nikiniki** に対する、明確で強い想いをお持ちなんです。

鈴鹿 お菓子の各分野には各々プロの方がおられます。そういった他の分野に入っていくのではなく、私たちは自分たちの得意とするプロフェッショナルな分野で専門性を突き抜けていきたい、と考えています。

また、ニッキは苦手とおっしゃる方がいますが、当社では刺激が強すぎず風味が豊かなものを使っていますので、召し上がってみるとおいしいという方が多い。ニッキを味の根幹としているハッ橋ですから、ニッキに対してもこだわりがあるのです。そのため、**nikiniki** はさまざまな分野に手を出すのではなく、ハッ橋とニッキの専門店と考えています。

今は比較的生ハッ橋の商品が脚光を浴びていますが、生ハッ橋だけでなく、（焼き）ハッ橋にもまだまだ可能性があるとと思っています。ハッ橋を使った **nikiniki** の商品には、餡やキャラメルをかけたヌガティン、細かく砕いてチョコレートと合わせたロシエなど、ハッ橋を素材として変化させていったものがあります。

このようにハッ橋にこだわり、ハッ橋をいかにおいしく食べてもらえるか

外感を与えてはいけない、という意味です。

小西池 一度離れたお客様に戻っていただくのは並大抵のことではありませんしね。それこそ、老舗のアドバンテージを損なうことになりかねません。疎外感を与えないということについて、経営の現場で認識された機会はありましたか？

鈴鹿 **nikiniki** を始めた際に気づきの機会がありました。現在、**nikiniki** ではパッケージを緑色にしています。当初は、地元の若い女性をターゲットにしたいということでピンク色にするという案もありました。でも、ピンク色にしてしまうと男性や年配の方は手に取りにくくなるかもしれない。今、**nikiniki** のリピーターのお客様には男性や年配の方も多いです。こうしたお客様を、排除していたかもしれないのです。

小西池 確かに、ピンク色のものをひとりで持つのは、少し抵抗がありますね（笑）。

鈴鹿 聖護院ハッ橋総本店でも、若い方をターゲットにする商品は確かにあります。ただ、あまりにも他の層の方を受け入れられない商品がひとつお店にあるだけで、「あ、自分たちのお店ではなくってしまったな」と寂しい

というのを提案するブランドが **nikiniki** です。単に流行を追ったり「これは売れるか」という視点だけで商品開発をしているは、伝えたい味がなかなか伝わらない。自信を持って、「私が好きだから食べてみて!」といえるものだけを形にするようにしています。

小西池 結果として、**nikiniki** はずいぶんと成長しましたね。

鈴鹿 おかげさまで発売以来、ご好評いただいています。ただし、人気があるからといって、**nikiniki** を独立させて、そこで大きく採算をとろうというような想いはありません。あくまでも商品の質にこだわって、お土産ものには対応できない手仕事で作られたものも多いので、申し訳ありませんが、品切れしてしまう日も多いのです。しかし質を落として簡易化、機械化することは、考えていません。

nikiniki は、メディアで取り上げていただく機会も増えてきました。しか

新ブランド「**nikiniki**」の商品。「カレドカネール」(左)と「季節の生菓子」(右)。どちらも季節によりデザインや中身が異なる。



想いをされる方もいらっしゃるでしょう。大事なお客様に疎外感を与えるのは京都のお商売ではない、と社長にいわれたことが、わかりました。

小西池 社長は社長で、長い経営のなかでさまざまな経験をしてこられたのでしょね。

鈴鹿 そうだと思っています。いろいろ苦しいこともあったのでしょうか。考えたことを今は言葉に出してくれるので感謝しています。私としては、そこからの気づきをしっかりと得ていくことが大事だと思っています。

プロデュース役に徹する

小西池 社員の皆さんの意見や、現場の実態を把握するためにどのようなことをされていますか？

鈴鹿 とことん話をするという雰囲気的大事にしています。長く商いを続けていると、「今までこうだったよね」



自分たちの
常識は非常識かもしれ
ない、という
目を持つことが
大事ですね。

も当初は、お菓子そのものの紹介が中心だったのですが、今では、聖護院ハッ橋総本店の紹介やハッ橋の歴史にまで取材内容が広がっています。**nikiniki** の目的は、新しいお菓子、目を惹くお菓子を作ることで、ハッ橋を食べていただくきっかけを作ること。テレビを観て関心を持たれた方、**nikiniki** を通じて初めてハッ橋を召し上げる方に対して、ハッ橋の入り口としての役割をはたしてくれていると思っています。

小西池 新しい商品にも、伝統的なお

菓子作りの理念が踏襲され、それが聖護院ハッ橋総本店の文化の新しい側面となって息づいている。**nikiniki** はまさにハッ橋への入り口を広げることに貢献しているわけですね。

易きに ながれない

京都の商売

小西池 外国からの観光客への対応や新ブランド **nikiniki** について、「変えるもの」と「変えないもの」について、

特集／昔の暮らし力



Special Feature / The Power of Traditional Life

というような考えに陥りがちになります。「社内のおたりまえ」とでもいうのでしょうか。ただ、このような考えが蔓延すると、時代の変化に対応できなくなってしまう。

小西池 そうですね。自分たちの常識は非常識かもしれない、という目を持つことが大事ですね。現状に安住するのではなく、何かおかしいのではないかと、変えた方がいいのではないかと、いう気持ちを持ち、そういう雰囲気組織内に作っていくことが重要ですね。ただ、このような「揺らぎ」を実現するのは難しいですね。たとえば、nikinikiという新しい商品を作るときには、どのように取り組まれたのでしょうか。

鈴鹿 私は自分で商品を作れる職人ではありません。そのような者が「あれ作って、これ作って」と言っているのだらうかと悩んだこともありましたが、しかし、作れるようになると、作るのが大変だとか数多く生産できないなど、自由な発想を心の中で制限する場合もあるのですよね。今は、あえて私の考える理想のアイデアをそのまま投げて、後のことは製造のプロに考えてもらう、という発想です。技術役ではなく、プロデュース役ですね。

小西池 そうだからいいのでしょうか。知りすぎるとかえって縛られる。知らないからこそ本質に入れることもあるでしょう。新鮮な目、普通の感覚の強みってきつとあります。プロデュース

役に徹するというのは重要ですね。**鈴鹿** そうおっしゃっていただけると、心強いですね。

地元とのつながり

小西池 さて、地域とのつながりについてお尋ねします。京都には独特の商売の考え方があり、活動の拠点である地元との関係も大切にしていると聞いています。御社ではいかがでしょうか。

鈴鹿 地元とのつながりは強いですね。私は子どもの頃から新年会やさまざまな社内行事に出ていて、それが当たり前だと思っています。洛趣会という京都の老舗の店主が正装してお客様をお招きし、商品をご紹介します会が、昭和3年より開催されているのですが、幼い頃の私は、開催地のお寺のお庭でよく遊んでいました。その時、一緒に遊んでくれた人たちが、世代交代で今や経営に携わっておられますが、そのような人とは今でも気楽に相談ができる密な関係にあります。

やはり京都は小さな街ですので、会社同士のつながりも強いと思います。洛趣会以外にも、ハッ橋の組合や和菓子組合、お土産屋さんの組合、取引先などさまざまな結びつきがあります。地元の聖護院の会というものもあります。他にも分野を超えた、仕事かプライベートかが線引きできないような関

係も多く、これらの結びつきが信頼を生んでいます。

小西池 そのような結びつきに関連した活動としては、どのようなものがありますか？

鈴鹿 この地で看板を出して商売をしている身ですので、些細なことですが、地元の運動会ではお菓子を提供したり、幼稚園の餅つき大会では餡を提供したりもしています。自然とお互いが知り合いとなり、挨拶も交わす関係になります。「お菓子を提供しなさい」などとは誰からもいわれませんが義務ではありませんが、地元の方に対していつもありがとうの想いで接すると、自然とこうした協力体制ができていくのです。ありがとうの気持ちがあるのと、あそこの方にはご迷惑がかかるかなと思えば、先に挨拶しておこうと、自発的に思えるようになります。地元と繋がるといえるのは、何も決まった集まりに顔を出すとか役を引き受けるということだけではなく、日頃の気持ちではないかと思っています。

そのような関係があるからこそ、当社の存在を皆さんに温かく見守っていただけるのだと思います

小西池 こうした地元とのつながりがあるからこそ、30年以上も事業を続けておられるというわけですね。

鈴鹿 そうでなければ、続かないでしょう。地元で認めてもらえてこそではないでしょうか。本店には、お菓子を

すなわち、お互い疲弊する競争に終始するのではなく、共に利する、いわば「共創」を目指すという考えですね。**鈴鹿** まさにそうですね。各々得意分野を活かしていこう、ということとお互いのいいところは取り入れつつ、



Konishiike Tooru + Suzuka Kanako

聖護院ハッ橋総本店店頭にて。

各々が価値をしっかりとお客様に伝えることが大事だと思います。それこそが本当の競争だと思えますし、価格だけの勝負はどこか違和感があります。

特集／昔の暮らし方

お求めになる地元の方もたくさんいらっしゃると思いますが、そのようなお客様にとって、私たちは近所のお菓子屋さんですし、こうした方が長年私たちを支えてくださっています。

また当社は、吉田神社の節分祭に、明治30年代から出店しています。収益目的だけでなく、今も「ここでお詣りして聖護院さんでハッ橋買って食べな、新年迎えた気がせえへん」とおっしゃる何人ものお客様がいらっしやあって、頭が下がります。ところで、御社と地元の方との接点はいかがですか。

小西池 同じですね。地域との関係はエネルギーの供給など事業に関するものだけではなく、地域や自治体の行事に積極的に参加するなど、日頃から地域の皆さんとふれあい、強固な関係づくりに努めています。

鈴鹿 長く続いている企業はそうですね。御社のガスビル食堂は以前から知っており、親しみがあります。会社の中に、社外の方が自由に入れる場所があるというのは素敵ですね。お客様との距離を縮める重要な機会になっているのではないのでしょうか。

競争は共創

小西池 ところで、ご近所には同業者もおられます。競争については、どのようにお考えでしょうか？

あるのはやはり「おいしい」からではないでしょうか。見かけだけのものや価格だけのものでは、一時的なもので終わってしまうでしょう。

小西池 それが続けること、続くことの原点ですね。

夢を実現し続ける

小西池 昨年の秋にドラマ化された『下町ロケット』という小説があります。作品の登場人物である経営者が自らの夢を持ち、それを従業員らと分かち合い、実現しようと奮闘するドラマです。さまざまなしがらみや困難を乗り越えて夢に向かって突っ走る姿勢が、すごく爽やかに感じられました。これからは、鈴鹿さんの夢を会社で共有し、育てていくことが大事ですね。

鈴鹿 ありがとうございます。何をやるにしても、夢は情熱がないと続きません。「こんなのがあったらいいな」というものを実現し続けていきたいと思っています。忙しい日々ではありますが、このような想いを大事にしていきたいですね。

小西池 鈴鹿さんの夢が、商品となって実現し、御社の未来の発展、そして次の300年に繋がっていくことを願っています。本日はどうもありがとうございます。



Special Feature The Power of Traditional Life Part 2

能楽に おける 技能継承と 人材育成に ついて

組織を構成するのはひとりひとりの個人であり、個人の知識・スキルを継続的に獲得・発揮させることは、どの組織にも共通する課題である。しかし、人材育成は個人だけで完結するものではなく、組織がキャリア育成の仕組みをどのように整えるかも重要である。600年超の歴史のなかで、個人のキャリアの成長と、流儀の技能を引き継ぐ仕組みを確立させてきた能楽から、現代の組織が学ぶべき、人材育成と技能継承のあり方を見る。

西尾 久美子
Mishio Kumiko

見せ場が多く、
200を超える
能の曲目のなかでも、
大曲として知られる
『道成寺』。
友枝雄人写真左端
撮影／石田裕

能楽（＊1）は、14世紀に観阿弥や世阿弥によって確立された歌舞劇である。2008年にユネスコの無形文化遺産にも指定され、日本の伝統文化を代表するものとして広く知られている。能楽の舞台では、若手からベテランまでの能楽師（＊2）が一堂に会している。本稿では、能楽における人材育成の仕組みに注目し、伝統技能を現代にいたるまでいかに継承してきたか、その特色を考えていく。

「年来稽古条々」

まず、能楽の人材育成について、歴史をひも解いてみよう。能楽の礎を父観阿弥（1333～84）とともに作った世阿弥（1363？～1443）は、『風姿花伝』（＊3）という有名な書物の中に「年来稽古条々」（生涯にわたる能の稽古の心得）という技能育成に関する項目を記述している。

この中で世阿弥は、生涯にわたって能楽に携わる人間の道のりを年齢に応じて7つの段階（第1段階…7歳「幼年期」より、第2段階…12、3歳より「少年期」、第3段階…17、8歳より「変声期」、第4段階…24、5歳より「青年期」、第5段階…34、5歳より「壮年期」、第6段階…44、5歳より「初老期」、第7段階…50有余「老年期」）に区分し、それぞれの時期に育成者や被育成者が気を付けるべき点を

次のようにまとめている。

初期の第1と第2の段階では、本人の意欲を大切にして、無理に教えこまないようにするなど育成する側の関わりが重要であること。第3段階では、変声期という身体の変化に直面してモチベーションが低下するが、キャリア形成においてこの節目での対応が一生を決めることになるので心して稽古に励むこと。さらに、大人として技能を身に付けた第4段階では、自分の獲得した技能を評価する視点を能楽師自身が持つこと。第5段階では、この時期を絶頂期としつつも、一方で冷静に自らの能力発揮を振り返り見極めること。そして、第6段階から第7段階にかけては、技能が年齢とともに変化していくことを自覚すること、などの重要性を指摘している。

つまり、世阿弥は能楽師の技能や育成方法について段階ごとに区分して考えていた。まず、キャリア形成の初期の段階では、指導育成者（教える側）が被育成者（学ぶ側）のモチベーションを維持し、年齢とともに指導育成方法を変える。キャリア形成中期以降は、学ぶ側が自らの技能を見極める能力を身に付けさせる。そして、キャリア形成後期では、学ぶ側が自らの能力の変化を自覚して技能を発揮していく。このように、キャリア形成のプロセス（段階）に応じた育成という視点を持っていたといえる。

現代の能楽の指導方法

では、現代の能楽師は、技能継承や人材育成について、どのように考えているのだろうか。プロフェッショナルとして舞台に立つことを本分とし、一門を率いて伝統芸能を継承することに責任を有する立場にあるシテ方（＊4）の能楽師にお話を伺ってみると、現代の能楽師の指導には年齢に応じて5つの段階（子方、第1期、第2期、第3期、第4期）があることがわかった。

世阿弥の7つと現代の5つ、能楽の人材育成に関する段階の区分の違いは、世阿弥の第1と第2の段階が現代では子方の時期になっていること、また第7段階が現代ではなくなっていること、これら2点である。これらの違いが生じた理由として、子方時代は義務教育と修業の両立の時期としてまとめられ、また50有余を老年期とすることは現代の平均寿命を考慮すると妥当性が乏しいからと考えられる。

もちろん、世阿弥が記したのと同様に、現代の能楽の人材育成も、それぞれの時期に応じた課題を指導育成者が理解したうえで、能楽という歌舞劇の特色を活かした指導方法がとられている。これを可能にしているのは、能楽の師匠自らが、演じるプロフェッショナルであるからだ。弟子が技能的に上手く演じるだけでなく、演じながら何

をどのように伝えるのかということまで、師匠は自らの経験を踏まえつつ、深く掘り下げて教える。教える側が、演じるプロであるので、伝統文化のより深い意味での継承・育成が成り立っているのである。

また、能楽には「芸養子」という言葉があるように、後継者が血縁に限定されてはいない。一門の長が、伝統文化を担う意欲と覚悟を持つ若者を技能継承の担い手として招き入れ、指導育成のプロセスに深く関わっていくこともある。

では、能楽師はこのキャリアパスに沿って、どのようにプロフェッショナルとして育っていくのだろうか。現代の5段階の育成内容について、複数のシテ方の能楽師の方のお話を参考にしてみよう。

「子方」

3歳や5歳など幼い時期から変声期を迎えるおおよそ15歳までの時期を子方と呼ぶ。子方のときは、「面」を付けず、子供らしくのびのびと舞台で演じることを主眼に、その後の基礎になる「体全体を使って声を出すこと」と「辛抱（舞台上でじっとしていることなど）を覚えること」を教えることが育成の目的である。

中堅能楽師の方は、キャリアのスタートについて、「気がついたら舞台上に立って、祖父の子方を務めていました」

「能には、子方が必要な曲があります。子方がいないと出せない曲があるわけです。そうすると、外孫であるうがと

にかく身内に子方になれる子がいると、『あの曲が出せる』ってなりますよね。そのような流れで、普通にこの世界に入っていった感じだと思います」と、祖父が能楽師だったという経緯で舞台に立つことになった経験を話している。

子方はいくつか舞台に出ると、本番の舞台の雰囲気がわかるようになるという。子方での経験を経て、客席から注目される舞台という能力発揮の場の特色を、自然に理解していく。

子方の時期の人材育成の特色は、予定の期日までに特定演目の役を演じることができるように稽古をすることである。基礎技能だけを抜き出して稽古をするという方法ではなく、舞台に出る稽古を通じて、必要な基礎を身に付けさせていくという指導方法がとられている。

第1期（15歳頃からの約10年）

子方を卒業する声変わりの時期を迎えると、稽古の方法も変化する。声が落ちていくから、能楽の3つの基礎技能、「構工」（基本的な立ち姿）・「運び」（擦り足を基本とする歩き方）・「謡」（体を使った発声方法）の稽古をする。能楽舞台にあまり立てなくなるこの時期に、将来につながる基礎の稽古が本格的に行われるようになる。



「将来のためのトレーニングのような稽古です。『運び』と『構工』と『謡』が、きっちりできるかできないかで将来は大きく変わってきます」と、この時期の大切さは、能楽師にも自覚されている。

この基礎的な技能育成のためには「体の筋肉に覚えさせる。頭が覚えらんじゃなくてですね、体に覚えさせて

いくわけです」 「体が覚えるのに3年かかったり5年かかったり10年かかったりするわけです」と、ベテランの能楽師は語る。基礎技能の育成には時間がかかり、しかも進捗は人それぞれであるので、目途は人によって異なってくる。こうしたお話から、この時期は

特集／昔の暮らし方

子方は、能楽師の縁者が務めることが多い。友枝雄人氏の子息の雄太郎くん。成寺』（＊7）という3つの曲目が、特別な披露ものとして知られている。例えば、2013年に大槻文蔵氏の芸養子として披露された大槻裕一氏は、2011年に『石橋』を披露、2015年の年末に『乱』を披露している。能楽師がどの楽曲を演じるのかは公

演のプログラムに明記される。このため、一緒に舞台上立つ能楽師だけでなく、能楽に詳しい観客に対しても、キャリア形成のどの段階にその能楽師が位置しているのが明示されることになる。

第2期（25歳前後からの約10年）

より難しい演目の経験を踏まえていくことが、師匠の役割となる時期である。

曲目が持っているテーマは何か、それはどういう事を言っているのか、さらにどのように表現しないといけないのかなど、演目の芸術性を解釈し表現することに師匠が関与し、指導育成をしていく。そのためには、技能発揮の場である能舞台に立つことが必須である。

そこでは技能に応じた楽曲を披露することが重要になる。一方で、公演は興行でもあるという点を考慮すると、鑑賞する観客にとって親しみのある楽曲を選定することも必要である。つまり、技能育成という事情だけで楽曲を決めることは難しいのだ。

「同門会を、今は1年に4回やっています。1年ぐらい前に日取りを決めて、半年ぐらい前に次の1年後の曲目を決めていきます」と、一門の長の能楽師は、かなり前から準備していると話している。月一度程度開催する自主公演とは別に公演を企画し、計画的に一門に所

属する能楽師のための技能形成の場を設定しているのだ。

第3期（35歳前後からの約10年）

この時期になると、弟子に演目の解釈について少しでも考えさせ、その解釈に対して師匠が指導するようになる。芸術性の伝承に、より注力する指導方法を行う。そして、作品の中にある多様な世界観を師匠と弟子が一緒になって追いかけていく、というこれまで積み上げてきた技能と、作品の持つ芸術性の両方を探求する指導が行われる。

この時期以降に演じられる、キャリアの節目となる特別な楽曲もある。流儀によって楽曲は異なるが、例えば『安宅』（*8）の勸進帳や『望月』（*9）の獅子などである。

また、この時期は、内弟子時代を終え独立を果たす頃でもあり、一門だけでなく、同世代で同人の会を作ることもある。

ある中堅の能楽師は、技能を発揮し磨く場を同世代の仲間と協力して設定することについて、「完全に自分たちで企画しています。二番立ての能を年に2回やって、1年のうちに一人一番ずつは舞台に立てるようにして、定期的に開催しています」と、技能を磨く工夫を語っている。そして、その理由として、「個人でやるよりは集まってやった方が経済的にも助け合えるし、同世代でやるということが良い意味で

リアが形成されていく。

能楽の事例からの学び

能楽師の育成は、家元制度や徒弟関係など封建的とも受け取られる仕組みによって可能になっていると一般的には思われがちである。しかし、節目の楽曲を披くという行為により、長期継続的な技能形成の流れがあること、さらに、現場での能力発揮の場の設定とともに技能育成を計画的に実践していくという特徴が能楽にはある。

技能を磨くことは終わりが無い道だと言われる。だからといって人材育成に関して、効率性や有効性を見逃してよいというわけではない。能楽は、この難しい課題に取り組み、所与の仕組みを大切にしながら、内外の環境の変化に適応してきた。以下では、本事例から現代の人材育成に活用できる点を考察していこう。

まずは段階に応じた指導育成方法の明確化、次に必要とされる技能とそれを発揮するための場の設定、そして切磋琢磨する仲間の存在、最後に、教える側が自ら技能を磨き続けること、これら4点が重要である。

ここから、私たちが人材育成のうえで学ぶポイントとしては、指導する側が技能育成のプロセス（段階）を明確にし、それぞれの段階に応じた関わり方を行うこと、獲得したあるいは獲得

のお互いの刺激になる」と、経済的なことだけではなく、同世代ならではの切磋琢磨ができる点を挙げている。

師匠の存在は非常に大切であるが、キャリア形成の中期以降は同期等との関係性も重視されている。つまり目標とする師匠や高いレベルの技能を有するベテランの能楽師との関係性だけでなく、切磋琢磨する仲間との関係性の中で長期的なスキルを磨いていくという、自律的な技能育成の歩みが実践されている。

第4期（45歳前後からの約10年）

弟子が何か聞きにきたときのみ教える、あるいは違っていたらどうも違う、といった程度のアドバイスにとどめるなど、師匠側からの特別な指導は控える時期である。

この時期になると演者の「人間性」が大事となる。その「人間性」を舞台上で伝えるには、「立っている存在感、座っている存在感」が必要となる。これは師匠が教えてできるわけではなく、また自分でそう思ってもできるものでもなく、弟子が経験と稽古を積み重ねる中で自然にできあがっていくもので



右／大槻文蔵氏（左）の芸養子である裕一氏（右）。
「石橋」の赤獅子の稽古をつけてもらう。写真提供／読売新聞社

上／「石橋」の舞台を文蔵氏と務める裕一氏（左）。



すべき技能を発揮できる機会を創出する組織（チーム）を工夫すること、そして、能力の進捗を共有しつつ自己を客観視できる環境を整備することが挙げられる。

また、指導育成を担う側が、プロフェッショナルとして課題に挑戦し、技能を磨き続けていくことも重要である。企業組織では、教える責任を担う管理者（教える側）が、被育成者（学ぶ側）と技能を共有しているとは限ら（へ）



2014年に、12年ぶりに『道成寺』を演じた友枝雄人氏。2時間近い舞台は、技術のみならず、体力、気力の充実が問われる。撮影／石田裕

ない。しかし、管理者が現状に満足しない姿勢をもちつつ努力し続けることは、若手や中堅に長期的な目標を示唆するために重要である。教える側と学ぶ側で、能力を磨くという姿勢を共有することは、組織の一体感を生み出し、

変化に対応し、変革を促すことにもつながる。

つまり、能楽という伝統文化の事例から、技能継承・育成のために私たちが学ぶべきもひとつも大切な視点は、人材育成に対する、育成する側や組織の関わり方である。若手に努力する姿勢を問う前に、必要とする能力を的確に規定し、それを仕事の場を通じて効率的かつ継続的に育成する仕組みを作ることが重要なのである。

末筆ながらインタビューのご協力をいただいた能楽師の皆様や関係者の皆様に深く御礼申し上げます。また、貴重な写真のご提供を賜りました、大槻文蔵様、大槻裕一様、友枝雄人様（順不同）に心から御礼申し上げます。

特集／昔の暮らし方



Special Feature / The Power of Traditional Life

（*1）能と狂言をさす総称。
（*2）能楽を演じることを職業とする。能役者ともいう。

（*3）能楽の芸術論を述べた書。世阿弥が記したものであるが、父親阿弥の考え方も入っており、親子二代の能楽師の経験に基づいて考え方がまとめられたものである。

（*4）能の主役を演じる役者とその集団。能面をかけ、あらゆる役に扮する。能の役柄には「シテ方」の他に、現実の男性だけに扮する「ワキ方」、狂言の演目を演じる「狂言方」、笛・小鼓・太鼓を演奏する「囃子方」がある。

（*5）能楽の演目のひとつ。文殊菩薩が住む霊山を訪れた法師が石橋を渡るうとする、童子が現れ、危険な橋なので奇瑞（きずい、めでたい）ことの前兆として起こる不思議な現象）を待つようにと告げる。やがて菩薩に仕える獅子が現れ、紅白の牡丹に戯れつつ舞う。前半の重厚さと後半の華麗で豪快な舞の対比が見どころ。

（*6）能楽の演目のひとつ。中国の伝説上の動物・狸々が、百薬の長といわれる酒の効用を称え、舞をみせる。「乱」は速度の変化が多い特殊なリズムの曲で、演者の技能が必要とされる。

（*7）能楽の演目のひとつ。蛇になり、鐘に隠れた男を巻き殺した娘の恋の執念を描く。この演目にのみ用いられる「乱拍子」という特殊な舞・激しい「急の舞」、重い鐘への飛び入りなどの見せ場が続く、能楽師にとって技術取得認定の曲とされる。

（*8）能楽の演目のひとつ。兄頼朝に追われる義経一行が安宅の関所で不審がられたところを、弁慶の機転で難を逃れた。勸進帳を即興で読み上げる弁慶と応対する関守富樫のやり合いが見どころ。

（*9）能楽の演目のひとつ。望月秋長に殺された安田友治の妻子とその家来が、望月を油断させるために、謡、鞆鼓（かっこ）

の演奏、獅子舞を見せ、見事敵討ちを果たす。謡、鞆鼓、獅子舞と芸づくしの演目。

（*10）老女を主人公とする能。能では女性を描くことと老いを表すことを重くみる。両方を兼ねた老女を主人公とする演目は別格として扱われ、技能と精神性を満たした演者にのみ上演が許される。

参考文献

- 小林貢・西哲生・羽田昶（2012）『能楽大事典』筑摩書房。
- 世阿弥・竹本幹夫訳注（2009）『風姿花伝・三道 現代語訳付き』角川ソフィア文庫。
- 西尾久美子（2014）『能楽の先生』日本労働研究雑誌』第645号、46頁、49頁。
- 西尾久美子（2015）『能楽の人材育成——世阿弥の「年来稽古条々」をキャリア論で読み解く——』現代社会研究』第18号、75頁、90頁。
- 西野春雄・羽田昶編（2011）『新版 能・狂言事典』平凡社。
- 野村四郎（2015）『狂言の家に生まれた能役者』白水社。
- 増田正造（2015）『世阿弥の世界』集英社新書。
- 山中玲子監修（2014）『世阿弥のことば』100選』檜書店、24頁、104頁。

参考ホームページ

公益社団法人 能楽協会

<http://www.nohgaku.or.jp/>

Mishio Kunitoko

京都女子大学現代社会学部教授。法政大学イノベーション・マネジメント研究センター客員研究員。野上記念法政大学能楽研究所客員研究員。主な著書に『京都花街の経営学』『舞妓の言葉——京都花街・人育ての極意』『おもてなしの仕組み——京都花街に学ぶマネジメント』、編著に『現代社会を読み解く』などがある。



路地裏でたわむれる、大阪くらしの今昔館の名物犬「てん」と「ろく」。館内の動物たちはすべて精巧な置物だ。



裏長屋の奥で飼われているニワトリ。

Special Feature The Power of Traditional Life Part 3

見て、聞いて、触って楽しむ、住まいと暮らしの博物館

町会所前にある用水桶。木造家屋が密集し、火事を最も恐れる町の防火用水として不可欠の共用整備。



重厚感のある唐高麗物屋の軒瓦。



洗濯物をたたいて柔らかくする砵(きぬた)と打盤(うちばん)。

薬屋の玄関庭より火の見櫓を望む。



町名の入った掛行燈。



上／小間物屋の店先に並ぶ化粧道具。台所の戸袋を見上げるとネズミが。



土蔵の窓。幾重もつけた段が閉じると、密閉状態をつくる。



風蝕した木目まで忠実に再現された長屋の外堀。



右／通りに大きく突き出した庇をもつ唐高麗物屋。町会所の屋根にそびえる火の見櫓は館のシンボリック存在。



取材・執筆／加藤しのぶ
撮影／竹前朗

看板奥に見える白い袖壁は、防火壁の役割を果たす。

ビル内に広がる、 実物大の 昔の暮らし

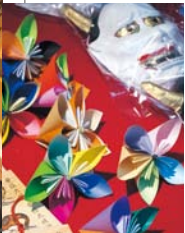
「大阪くらしの今昔館」の愛称で親しまれる当博物館は、大阪市北区天神橋六丁目の一角に建つビル内にある。エレベーターで8階へ上り、入口から誘われるまま最上階へと進むと、展望ロビーにたどり着く。ガラス張りの窓下に広がるのは、江戸時代・天保初年（1830年代前半）の「大坂町三丁目」の町並みだ。天井に届かんばかりの火の見櫓^{やぐら}が目を引く表通りには、風呂屋や町会所など人の集う施設や、呉服屋、薬屋、唐物屋といった商家が並び、狭い路地には裏長屋が軒を連ねている。これらが全て、実物大で再現されているのだ。

展示室は、9階が町並みを再現した「なにわ町家の歳時記」、8階は明治・大正・昭和の大阪を模型や資料で再現した「モダン大阪パノラマ遊覧」からなっている。さっと歩き見るだけならば10分とからない広さではあるが、館内には思わず足を止めて見入ってしまうような「仕掛け」が随所に込められ、訪れる人を楽しませている。

昔の暮らしに焦点を当てた博物館がなぜ今、話題になっているのか。谷直樹館長に館内を案内していただきながら、大阪くらしの今昔館の仕掛けや魅

入口に貼られた「井」の文字は、その奥に緊急時に誰でも使える井戸があるという印——町家衆が実際に操作をしつつ、説明を加えていく。来館者は町家衆の話から、さまざまな興味をもち、隣に並ぶ店に移動した際には自然と細部に目を凝らすようになる。谷館長の狙い通り、入館時にはあたかも映画の舞台を遠くから垣間見ていただけだったのが、いつしかこの町に住む人となつて、先人の知恵を目と耳と手で体感

町家衆イベントのひとつ「楽市町家」では、手作りのおもちゃが並ぶ。



力、また博物館が果たす役割などについてお話をうかがった。

来館者も 町の住民になる

展望ロビーから町並みを眺めている時の視点は「博物館に展示物を見に来た来館者」にすぎない。しかし9階に降り、出迎えてくれる木戸門（町の境界に建てられ、防犯機能を備える木製

の門）から一歩足を踏み入れると、視点は「大坂町三丁目という町を訪れた人」に変わる。

「来館者には町の住民になってもらおうと考えています。この町にやってきた訪問者や、そういった人を遠巻きに眺める一般の人という役割でもいい。何らかの形で町並みに入ってもらおう。そのためにも、ここでは禁止事項はほとんどありません。復元されている建物や展示品にも自由に触れてください、



庇を走る2匹のネコ。
館内いたる所に多様な動物の姿が見られ
動物探しも楽しめる。



展望ロビーより俯瞰する表通り。
館内は一定時間毎に、音と光と映像を駆使し
朝から夜の一日の変化が演出される。



特集／昔の暮らし力

Special Feature / The Power of Traditional Life

していることに気づく。これらが来館者の心をつかみ、来館者数は年々増加、昨年度は36万人が訪れた。殊にこの数年でその数は2倍に増えた。

近年の来館者増に一役買っているのは、韓国、中国、台湾からの観光客だという。館内どこで写真を撮っても絵になるとブログ等に紹介され、ブームに火が付いた。しかし、絵になる写真が自由に撮れるだけが人気の理由では

ない。アジア圏の旅行者にとつてはここが、母国と同様に木と紙と土の文化をもち、母国にも確かにあった古き良き時代の暮らしの姿が感じとれる場であるからなのである。

100年後には 貴重な文化財

「昔の暮らし」の実感を支えるのは、徹底的にこだわったハード（設備）面だ。



大阪くらしの今昔館館長

谷直樹

「昔のよさを改めて見直すことで、これからの考える重要な視点が生まれます」

写真も撮ってくださいと言っています」と谷館長は笑う。

復元された町並みに置かれている展示物で、ガラスケースに収まっているものは、ただのひとつもない。竈^{へっつい}に据えられた釜を実際に持ち上げて「重い」と唸^{うな}る人、町会所の庭の手水鉢^{ちょうすずばち}をなでる人、町家の中に上がり込む人までさまざま。いたる所で記念写真が撮られ、会話が弾んでいる。

展示品を遠巻きに眺める来館者に「どうぞ触ってみてください」「これ、どういう意味かわかりますか？」などと積極的に声をかけるのは、「町家衆」と呼ばれるボランティアの人々だ。台格子（作りつけの格子）や、その前にある「揚げ見世」「ぼったり床^{しょうぎ}」などと呼ばれる、跳ねあげて出し入れる床几の仕組み、店の外と内からの格子戸の見え方の違い、町会所隣の路地

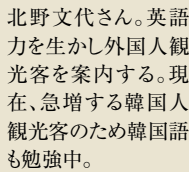
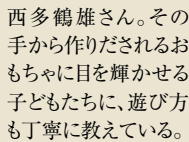
館のオープン当初、莫大な予算を投じてまがい物を作ったという批判もあったそうだが、「そうではない」と谷館長は力強く答える。大坂町三丁目という町名は架空のものだが、町並みの復元にあたっては現存している町家の遺構や、江戸期の町家絵図、明治期の集合住宅に関する資料などを徹底的に分析した。また実際の工事は、桂離宮の修理にも携わった数寄屋^{すきや}大工に依頼するなど「昔のまま」にこだわった。

「当時の町家は材木の接合に金具を使わず、2本の部材を長さ方向につなげる継ぎ手や、直角などある角度で接合する「仕口^{しぐち}」を作って組み合わせています。板塀^{いたべい}には日本古来の角形断面をもつ和釘、木部の彩色はベンガラを用い、土壁は下地も当時の工程通りに作るなど、いずれも建物が建ってしまえば見えなくなる細部にまで手を抜かず

にこだわって、当時の大坂の町並みを再現しています。ですから、この町家が100年後まで残っていれば、町家自体が平成の大工技術を示す文化財になると思っています」

しかし、当時の資料に忠実に作られた本物の町家とはいえ、新築のままでと時代色や生活感に乏しくなってしまう。 「そうした古びを出すために、松竹映画の美術監督にお願いしてエイジングという演出を施してもらいました」たとえば、町並みの中央に大店^{おおみせ}を構

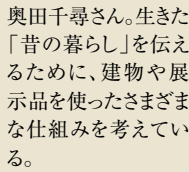
「町家衆」の方々



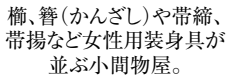
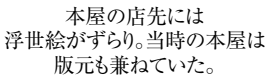
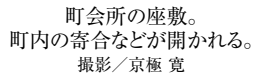
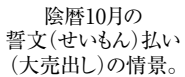
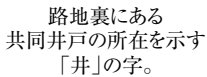
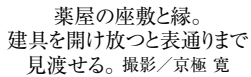
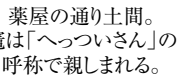
「町家衆の方々には、本人の都合にあわせ、好きな日時に来てもらっています。開館当時から来てくださっている方も何人かおられます。こちらから作業内容を指示するのではなく、その人が得意とすることを自由にやっていただいています」

開館時よりの町家衆のひとり、西多^た鶴雄^{づお}さんは、町家衆では最高齢の84歳だ。市内の小学3年生を対象にした体験学習や、手作りのおもちゃを使った遊びなどを通して、昔の暮らしを伝えたい。町家衆を続けているのは、「この町並みが好きで、ここの風景になりたいから」だと笑う。

土間につくられた竈や走り（流し）を指して「今のシステムキッチンと同じでしょう」とわかりやすい例を出したり、本屋では現代の書店の本の並べ方とどう違うかを考えてもらったうえで「和紙は柔らかいから、当時の本は平積みになっている」と説明する。「昔を知るということは、今を知ること。2000年前にはこのような暮らしがあったのだと知ること、今の生活のありがたさを実感する手掛かりになれば」と語る。



まずは町並みを一通り歩いてから
細部を見て回るのがお勧めだ。



博物館がなくなぐ、
昔の暮らしからの
提案

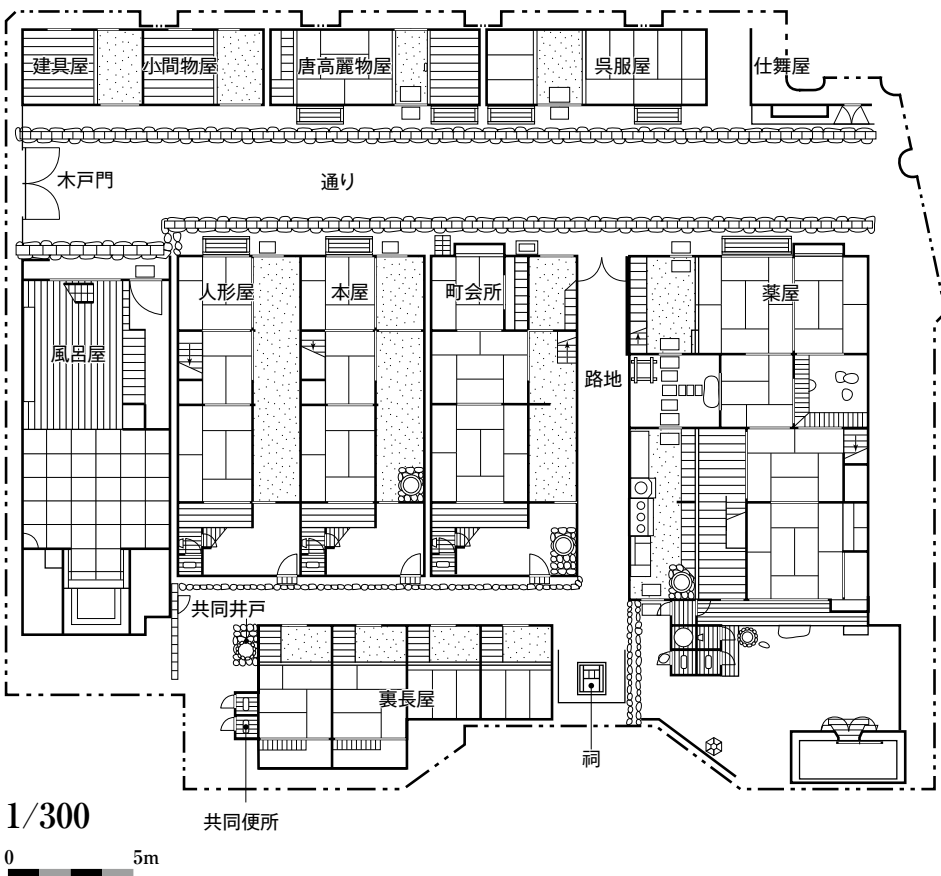
ここでは、博物館という場で、町家衆を核とした新たな形のコミュニティが発生しているといえよう。

谷館長に、大阪くらしの今昔館の今後の展望についてお話をうかがうと、まず、「急増する外国人観光客に、もう少し深いところまで日本の暮らしの文化を知ってもらえる取り組みをどう作るか」を挙げた。そのような仕組みができれば、外国人だけではなく日本人にとっても、自国の居住文化の豊かさを再認識する機会となるだろう。さらに博物館の果たす役割についてはこう語る。

「日本では江戸時代ですでに成熟したコミュニティがあったということを、きちんと伝えたいと考えています。さらに木造建築のよさ、解体して部分補修ができるという利点を、今一度見直す時期に来ていると思います。昔のよさを改めて見直すことで、これから考える重要な視点が生まれます。それは、ひいては持続可能な社会をつくることにつながっていくと思います」

博物館とは単に「昔」あったものを陳列するだけの場所ではなく、過去と未来をつなぐ重要な架け橋なのである

復元した
大坂町三丁目の
町家連続平面図



通りを挟み両側に
町家が並ぶ。
町会所脇の路地を
抜けると裏長屋が並ぶ。



「儉約」とは何か

石田梅岩の思想と行動

江戸時代の思想家、教育者である石田梅岩の教えには、日々の暮らしと密接に結び付いた「学び」の本来の姿がある。人の人たる道を説き、よりよく生きるために自らの「心」を問い直すその教えは、経済の混乱に揺れる当時の民衆を魅了し、日本全国に広がった。現代に至るまで「石門心学」として継承される思想のエッセンスを「儉約」の意味に探り、梅岩自身の実践をたどり直すことで、これからの学びの在り方を考える。

学びと暮らしの関係

本来学びとは、よりよく生きるための営みであり、日々の暮らしと密接に結び付いているはずである。学びは日常の暮らしのなかから生まれ、日常の暮らしに寄与してゆく。ところ（〜）

である。合格という結果は、その人に達成感やその後の意欲をもたらすかもしれないが、学びそのものがその人自身にどのような意味をもたらしたかまでを示してくれるわけではないのである。

以下、学びと暮らしの在り方を考えていくにあたって、江戸時代の思想家、教育者である石田梅岩（いしだばいがん）（1685〜1744）にスポットライトを当ててみたい。梅岩は、一町人として日々の仕事に励む傍ら、ほぼ独学で学問を学び、静坐をするなどの修行に励んだ。その結果、自己と世界とが一体化するというある種の神秘的な体験を遂げたのだった。ところが、そうした体験をもとに梅岩が人々に説くのは「儉約」や「孝行」というなんとも身近でありきたりの内容であった。その教えは、町人を中心とする当時の人々に受け入れられ、弟子たちは、それぞれの家業に励みつつ、梅岩の教えを学び合う学習組織を形成していったのである。今日、その教えは、石門心学と呼ばれている。

「人の人たる道」

まずはじめに、石田梅岩の生涯について簡単に触れておこう。梅岩は、1685（貞享2）年に丹波国桑田郡東縣村（現在の京都府亀岡市東別院町東掛）に生まれた。農家の次男であった梅岩は、11歳で京都の商家に奉公に出

高野 秀晴
Takano Hideharu



「梅岩講釈の図」（『石田勘平一代記』より）。
石田梅岩による講釈の様子。
当時としては珍しく男女が共に
聴講する姿が描かれている。所蔵／明倫舎



石田梅岩の肖像画。
人の人たる道を説く梅岩の教えは、
心の支柱を求める
当時の人々を魅了した。所蔵／明倫舎

が今日、学びと暮らしの関係は必ずしも明確とはいえない。例えば、ありきたりの話だが、受験に備えて勉強に励み、その結果、志望校に合格したとする。確かにその勉強は、その人の境遇を変え、将来を明るいものにするかもしれない。けれども、志望校合格という結果は、その人の学びの質や量をその人以外の人や組織が評価したもの（〜）

た。奉公先の都合で一旦帰郷するが、23歳の時に再び京都に出て、呉服商に奉公に入った。

弟子たちがまとめた『石田先生事蹟』によれば、2度目の奉公に出た時、梅岩は「人の人たる道」を説き広めたいという志を抱いていたという。どうしてこのような志を抱くようになったのかは謎であるが、「人の人たる道」を説くのであれば、まずは自らが「あまねく人の手本」になる必要がある。だから梅岩は、実直に仕事をする傍ら寸暇を惜しんで勉学に励んだ。朝は誰よりも早く起床し読書に励み、夜は周りが寝静まった後も勉強したという。

では、梅岩は何を勉強したのだろうか。当時、学問といえば儒学を指すことが一般であり、梅岩も『論語』や『孟子』といった書物に親しんだと考えられる。問題は、それらの書物から何を読み出そうとしたかである。後に梅岩は、「心ヲ知ルヲ学問ノ初メト云」と述べている（『都鄙問答』）。ここでいう「心」とは、人間の本性とでもいった意味である。つまり、自己の本質を問うことが梅岩にとっての学問の出発点であった。

「心」に立脚する学び

ところで、学びが「心」の思索へと向かっていったのは、梅岩の時代にお



石田梅岩遺品。
右端の香炉では、
線香を焚いて時間を
計っていた。
所蔵／明倫舎

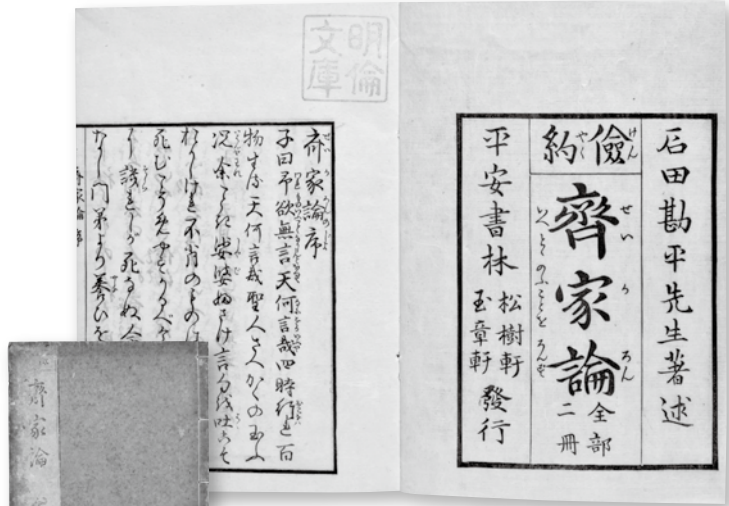
いて珍しいことではなかった。ここで時代背景を少し踏まえておくことにしたい。

石田梅岩が活躍した元禄・享保時代は、急激な商業化の進展とともに経済的な混乱があちこちで生じた時代であった。たとえ家計が安定していても10年後にはどうなっているかわからない。そのような状況のなかで、多くの庶民は自分の家が没落してしまうのではないかとという危機意識を持つようになった。そして、その危機意識を乗り越えるために、人々は新たな生活規範を求めて勉学に励んだのであった（安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー、1999年）。

したがって、その勉学は、単に家業に求められる実用的な知識や技能を習得するといったレベルにとどまるものではなかった。「心」に立脚点を求めることにより、自らの生き方にゆるぎない信念を得たいとする庶民の願望がそこにはあったのである。

梅岩の熱心な学びは、このような時代背景の中で進められたのだが、商家の奉公を辞めてまで学びに専念していたことが梅岩の特異なところであったといえる。35、36歳の頃から、梅岩は師となる人物を探し求めるようになり、小栗了雲（おぐりようぐん）という老僧に出会った。梅岩は、了雲に「心」についての議論を挑んだが、一蹴されてしまう。それから梅岩は修行に専念するようになり、

奉公を辞するに至るのである。そしてやがて梅岩は、2度にわたる開悟を体験することになる。開悟により梅岩は、自己の「心」が天の意思のもとにあること、したがって、自己の「心」こそが生きるうえでの究極的な規範である



石田梅岩著「齊家論」。右の「石田勘平」は梅岩の通称。弟子たちは本書から儉約の思想を学んだ。

所蔵／明倫舎

梅岩は、人々に「心」を知ること求めた。「心」を知れば、確固たる信念のもとで暮らしに向き合うことができる。そして、その暮らしは「儉約」にもとづくものになるだろうと梅岩は言う。

梅岩の著書『齊家論』によると、弟子たちが梅岩から学び取った最も大きなことの1つは儉約についてであったようである。では、梅岩が説き、実践する儉約とはどのようなものだったのだろうか。『石田先生事蹟』には、梅岩の日頃の行状が紹介されている。一例を挙げると、茶殻は捨てずに「ひたし物」にして食した、古くなった障子紙を「厠のおとし紙」に用いた、鼠に供するため米のとき汁を捨てずに外に溜め置いた、などである。一見すると、儉約というより「ケチ」とでも言いたくなるような行状である

「儉約」のもつ意味

かもしれない。だが、梅岩は、「儉約」と「ケチ」を明確に区別している。最後の鼠の例に見て取れるように、梅岩の儉約は決して私腹を肥やすための行いではなかった。むしろ逆である。

梅岩によれば、儉約すると自分が節約した「財宝」が世に「アマル」ことになる。こうして天下に流通する余財が増えていけば、餓死する者もいなくなるだろうし、民も豊かになるだろうというのである。とすれば、儉約という言葉は「施し」という意味を帯びてくることになる。実際梅岩とその弟子たちは、京都で貧窮者が続出した年に、精力的に施行活動を行ったのであった。梅岩らに言わせれば、この施行もまた儉約ということになるだろう。

儉約を財の流通ととらえた梅岩は、商業の社会的意義を積極的に主張した。例えば、私たちは、粗悪品を購入してしまった時、使ったお金がもったいないと感じる。ならば、自分が商品売る側になった際には、相手にそのような思いをさせぬよう、良い品を作ればよい。そうすれば、相手もお金をもったいないと思わないだろう。すると、お金は「天下」に流通することになり、「万物」が養われることになる。このことを梅岩は「万民ノ心ヲ安ンズル」と表現している（『都鄙問答』）。

自身の節約から万民の安泰へ。生き方としてのエコとでも言うべき梅岩の考え方は、今日の私たちから見ると楽

観的に過ぎるものかもしれない。だが、ここで大事だと思うことは、自分が儉約することの意味が「天下」との関連のもとに示されていることである。障子紙を再利用することや米のとき汁の使い道が世界の動きとの確かな関連のもとに位置付けられているのである。そして、このような意味での儉約を実践してゆくためには、絶えざる学びが不可欠だというのが梅岩の教えであった。

未熟だから学ぶ

職を辞してまで教育活動に没入していった梅岩に対し、弟子たちはそれぞれの家業に励みながら、学びを深めていった。その中心となったのが手島堵庵（てしまとくあん）（1718〜1786）である。京都の裕福な商家に生まれた堵庵は、18歳の時に梅岩に出会い、その2年後に「心」を知るに至った。けれども、堵庵が梅岩の教えを説き広める教育活動を本格的に始めたのは、1764（宝暦14）年、47歳になってからであり、それまでは家業に実直に励むことを優先したのであった。家業にしっかりと取り組むこと——それは師匠梅岩の教えを実践することでもあった。

堵庵は、家業を退いたのちに教育活動を開始したのだが、梅岩のような器量を持ち合わせていないと考えた堵庵は、自身の教えを「学びがてら」の講

釈と呼んだ。堵庵は、教えを求めてやってくる者たちと師弟関係を結ぼうとはせず、「朋友」と呼んだ。そして、才能と徳が乏しいと自覚するがゆえに、ともに学び合うことによって、梅岩の教えを実践していこうと考えたのである。

堵庵は、朋友たちの学びの会を「会輔」と呼んだ。会輔という語は、『論語』顔淵篇の「君子は文を以て友を会し、



手島堵庵の肖像画。梅岩の教えを全国各地に広めた。

所蔵／明倫舎

友を以て仁を輔く」という文言を典拠としている。この文言から堵庵は、「友によらざれば道にすゝみがたし」というメッセージを読み取ったのであった（『会友大旨』）。

会輔では、事前に出された日常に即した問いに対し、参会者が回答を持ち

特集／昔の暮らし力

梅岩の教えは、広範な地域に普及していくことになったのである。

これからの学び

清貧の生活を貫いた梅岩の学びは、利益やステータスといったものの獲得

を目指すものではなかった。自らの「心」を問い直し、自らの暮らしに密接に結び付いたものであった。そして、弟子たちは、自らの未熟さを自覚しながら、梅岩の教えを互いに学び合い、それぞれの暮らしに向き合っていた。才能や財力を前提とはしない学びの姿がそこにはあったといえるだろう。はじめに述べたように、本来学びとは、富や威信の獲得自体を目的とするものではない。暮らしを問う中から生まれるのが学びであり、特別な才能が必要であるわけではない。これからの時代には、富や才能を前提としない学びの在り方がますます求められることになるだろう。

各地に設立された講舎は、幕末維新期に廃絶したものが多い。だが、明治以降も存続した講舎や後に再興された講舎、そして、本誌で紹介されるように、今日も活動を続ける講舎もある。その活動には、これからの学びを考えるうえで大きなヒントがあるはずである。

Takano Hideharu

たかのひではる／1977年、広島県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（教育学）。現在、仁愛大学人間生活学部准教授。日本教育史、日本思想史専攻。著書に、「人物で見る日本の教育」共著、ミネルヴァ書房、「教化に臨む近世学問——石門心学の立場」（ベリカン社）がある。

心学のいまを訪ねる

石田梅岩の教えは、現代にどのように受け継がれているのだろうか。現存する関西の講舎——京都の心学修正舎と大阪の心学明誠舎——の活動を報告し、時代を超えて人々を魅了し続ける心学の「学び」の場を紹介する。

取材・執筆／里中 高志 撮影／永野 一晃

京町家に息づく 学びの伝統

「子曰く、君子道を学べば則ち人を愛し、小人道を学べば則ち使い易しと」
ほのかな灯りのもと、『論語』の素読を唱和する声が重なり、昔ながらの町家に響く。ここは京都の呉服問屋街「室町」と呼ばれる地域の一角に居を構える吉田邸。いまここで、石田梅岩の教えを伝える、心学修正舎の月1回の定例講義「会輔」が開かれている。参加者は高校生から年配者まで多様だ。石田梅岩——1685（貞享2）年、現在の亀岡の農家に生まれる。京都の呉服問屋で番頭を務めた彼は、172

9（享保14）年、45歳のときに初めて京都の町家で講席を開く。老若男女の分け隔てなく、また無料で講席を開くことは当時としては画期的なことであった。梅岩の教えは、彼の死後、弟子の手島堵庵らによって受け継がれ、諸国へも広がっていく。その中心となったのが、手島堵庵が1773（安永2）年に五条東洞院に開講した「修正舎」であり、1782（天明2）年に河原町三条に開いた「明倫舎」であった。

いま講義を行っているのは、心学修正舎の理事であり、『論語』を教える衣笠三省塾の塾主でもある長野享司さん。

『学べば人を愛する』とは深い言葉

きました。企業が倫理道德を見失いかけているいまこそ、また学び直す価値があると感じています」

心学修正舎の会輔で「石田梅岩の世界観と日本人の心」について語った後藤一成さんも、ビジネスマンとしての生き方に心学を活かしてきたひとりだ。大手電機メーカーを定年まで勤め上げた経歴を持つ後藤さんは、自らに「三愚」という号を付けている。



心学修正舎の理事長で、
㈱イセトーの会長を務める
小谷達雄さん。



明倫舎の柴田なほ子さん(右)と
心学修正舎の後藤一成さん(左)。
京都市内にある明倫舎の前で。

です。いま我々が『愛する』ということと男女の恋愛を思い出しますが、本来は人を大切に思うという意味です。『論語』の言葉は我々の社会のなかに身近にあるのですが、知らないで見過ごし、しまっていることが多い。ぜひ『論語』を読み込んでいただければと思います」

この「会輔」という定例講義の名称は、『論語』の「君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く」という文句にちなんで堵庵が名付けた。会輔の題材のひとつとして『論語』を用いるのも、梅岩以来の伝統だ。

続いては、心学修正舎理事の後藤一成さんによる、「石田梅岩の世界観と日本人の心」についての講義だ。そこ

ました。そして『真に良いお客様』は、約束を誠実に、必死に守ろうと努力する営業マンの姿を真の『正直、誠』として正しく評価されるということを悟り、サラリーマンとしてまったく悔いのない人生を送ることができたんです」

社会の人々の役に立つことを通じて自分も「生きる」ことを考えるのが正しい道である。そう説き続けた梅岩の商道德が、今日でも関西には息づいて

いる。京都の商家にいまなお「堪忍」という額がよく掛かっているのも、そのひとつの証なのだ。

京都における石門心学の学び舎として、心学修正舎と双壁をなしてきたのが、明倫舎だ。いまその理事長を務めるのは柴田なほ子さん。父は吉川弘文

不況のいまこそ 梅岩の商道德を

心学修正舎の理事長で、㈱イセトーの会長を務める小谷達雄さんは、代々心学の教えを受け継いできたひとりだ。

で解説されたのは、「誠」「正直」「儉約」という、町民にとって、最も身近な言葉を大切な理念として掲げた梅岩の教えの普遍性であった。「正直が行われれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし」「まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり」というその教えは、CSR（企業における社会的責任）の元祖とも言われ、渋沢栄一や松下幸之助も深く影響を受けた。



会輔での学びの風景。



会場には「堪忍」の額が掛かる。



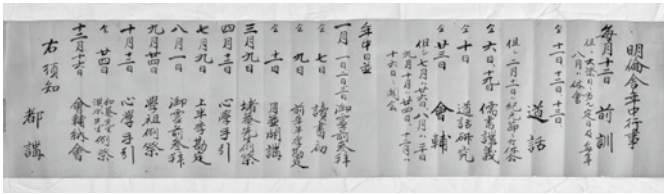
講師の長野享司さん。

した。利幅の少ない商いですので、いまだに子孫は苦勞をしています（笑）。でも、もしそのときにもっとぼろ儲けできる業種を選んでいたら、きっとどこかで倒産していたでしょうね。いまでも我が社には、無理な利益の出し方に関しては『それはそぐわないんじゃない』と、歯止めがかかる社風があるんです。心学はまさに現実に経営をしている人のための商道德として発展して

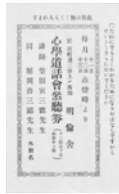
「酒はダメ、仕事は遅い、気も利かぬ」ということで『三愚』と自分を名付けた私ですが、『人間は天から正しいものを授かっているのだから、自分の善なる心に正直に従うのが人の道であり、商売の道だ』という梅岩の教えを学んだことで、営業マンとしての道が開け

特集／昔の暮らし力





明倫舎の年中行事を記した貴重な資料。



大正期の
心学道話会参聴券。



明倫舎の看板。

大阪商人の 源流としての 石門心学

「梅岩先生の教えは、人間は本来正しく生まれてきているのだから、教えがあれば正しく生きられるという性善説に立っています。人としていかに生きるか、という基本を普遍化することで、商人なら商売の道で正しい生き方ができるようになる。身近な話題で、身の回りの物事をどう解決するかを分かりやすく話したから、多くの人たちに受け入れられたんですね」

明倫舎では、石門心学に関する数々の資料を保管しており、会輔こそ開催はしていないが、心学修正舎などと積極的に交流を続けている。

そして、商業の都、大阪では、心学明誠舎が活動が続けている。1785（天明5）年に南船場心斎橋に創設された心学明誠舎は、いまでも大阪の経営者たちの重要な学びの場だ。2015年11月に開かれた「石門心学講演会」では、作家・玉岡かおるさんによる大阪商人と明治維新についての講演が行われた。参加者の多くは経営者だ。関西にかつて存在した商社・鈴木商店をテーマにした著書のある玉岡さんは、



石門心学こそが、大阪商人の源流だという。

その集まりでは、石門心学に関連する書籍を基に話題を提供する「読書紹介」も行われた。心学明誠舎理事の大塚融（とよむ）さんは、『アダム・スミス——「道徳感情論」と「国富論」の世界』（堂目卓生、中公新書）をとりあげた。実は、石田梅岩とアダム・スミスは生きた時代が近い。梅岩の『都鄙問答』の発刊が1739年、『齊家論』が1744年であるのに対し、アダム・スミスの『道徳感情論』は1759年、『国富論』は1776年だ。主張に類似点も多いといわれている。大塚さんは、西洋と東洋において、ともに資本

心学修正舎の会輔会場入口。
会場は京都の呉服問屋街「室町」の
吉田邸（京都生活工芸館・無名舎）。

主義の勃興期の経済における倫理の問題をとりあげた2人の共通点を、「信用」や「自律」という言葉をキーワードにして説明した。

中尾敦子さんは心学明誠舎副理事長であるとともに、石門心学の研究で高名な故・竹中靖一氏（元・心学明誠舎理事長）の娘でもある。中尾さんは言う。

「商売では相手が喜ぶことをしなさい、という心学の教えは戦後の日本の経済発展の基礎にもなっています。梅岩が偉大だったのは、身分差がはっきりしていた江戸時代において、女性や子どもも平等に学び舎に受け入れたこと。世の中をよくするには学びが重要です。そのためには社会教育に力を注いだ石門心学の教えを伝えていくことが重要であり、その結果として、もっと広まってほしいと思っています」

心学明誠舎理事の下野譲さんも「一生懸命にやれば幸せになれるという心学の教えのバトンを地道につないでいきたい」と話す。

また、心学明誠舎理事長の堀井良殷（よしたね）

さんは石門心学の社会的意義についてこう語る。

「石田梅岩は、『先も立ち、我も立つ』という共生の論理で社会に貢献することによって、商いは成立するのだと分かりやすく説きました。いまグローバルイズムの資本主義が広がっていますが、欲望のアクセルだけを踏んでいたら資本主義は危なくなります。欲望は発展の原動力でもあります、それを制御

するハンドルとブレーキがいる。それが石田梅岩の言う学びの力です。商売とは、社会に貢献するためのものだということをもう1回思い出すことで、資本主義は健全になるんです」

時代が移り変わり、商売の在り方が変わっていくほどに、梅岩の教えはますますその価値を増していく。その教えを受け継ぐ学び舎から、新時代のリーダーが生まれる日を期待したい。



心学明誠舎所蔵の資料
「童子教訓之講釈」は、江戸時代の
学びの場の様子をいまに伝える。

特集／昔の暮らし方



理事の下野譲さん。



副理事長の中尾敦子さん。



理事長の堀井良殷さん。



玉岡かおるさんを招いての講演会。



講演会の風景。



心学明誠舎の歴史資料。



近年、高層ビルの建設を中心に据えた再開発が大都市圏で相次ぎ、街の風景は急速に変わりつつある。生活の利便性は高まる一方で、都市空間の均一化が進み、街の表情は乏しくなっているのではないだろうか。京都の繁華街に存在する集合建築である〈会館〉から、現在の街づくりが学ぶべき空間の奥ゆきを考察する。

〈会館〉という迷宮

京都の集合建築に学ぶ都市の奥ゆき

加藤 政洋
Kato Masahiro

集合建築としての〈会館〉

まず、一枚の写真をご覧いただきたい（左頁上）。阪急京都線西院駅の近傍に立地する、立ち呑みを中心とした飲食店の集合建築である。角地の土地区画にあって、角を切ったファサードの正面に掲げられた大きな看板が、ひ

ときわ目を引いている——その名も「折鶴会館」。内部は2本の通路を挟んで店舗が並び、最奥には共同のトイレがある。その雰囲気は、まるで闇市を起源とする飲み屋街のようだ。

近年、酒場を特集する関西のローカル誌では、「折鶴会館」をはじめ、「新宿会館」や「四富会館」といった、「会館」と名のつく同種の集合建築が取り上げられることも増え、それらの店

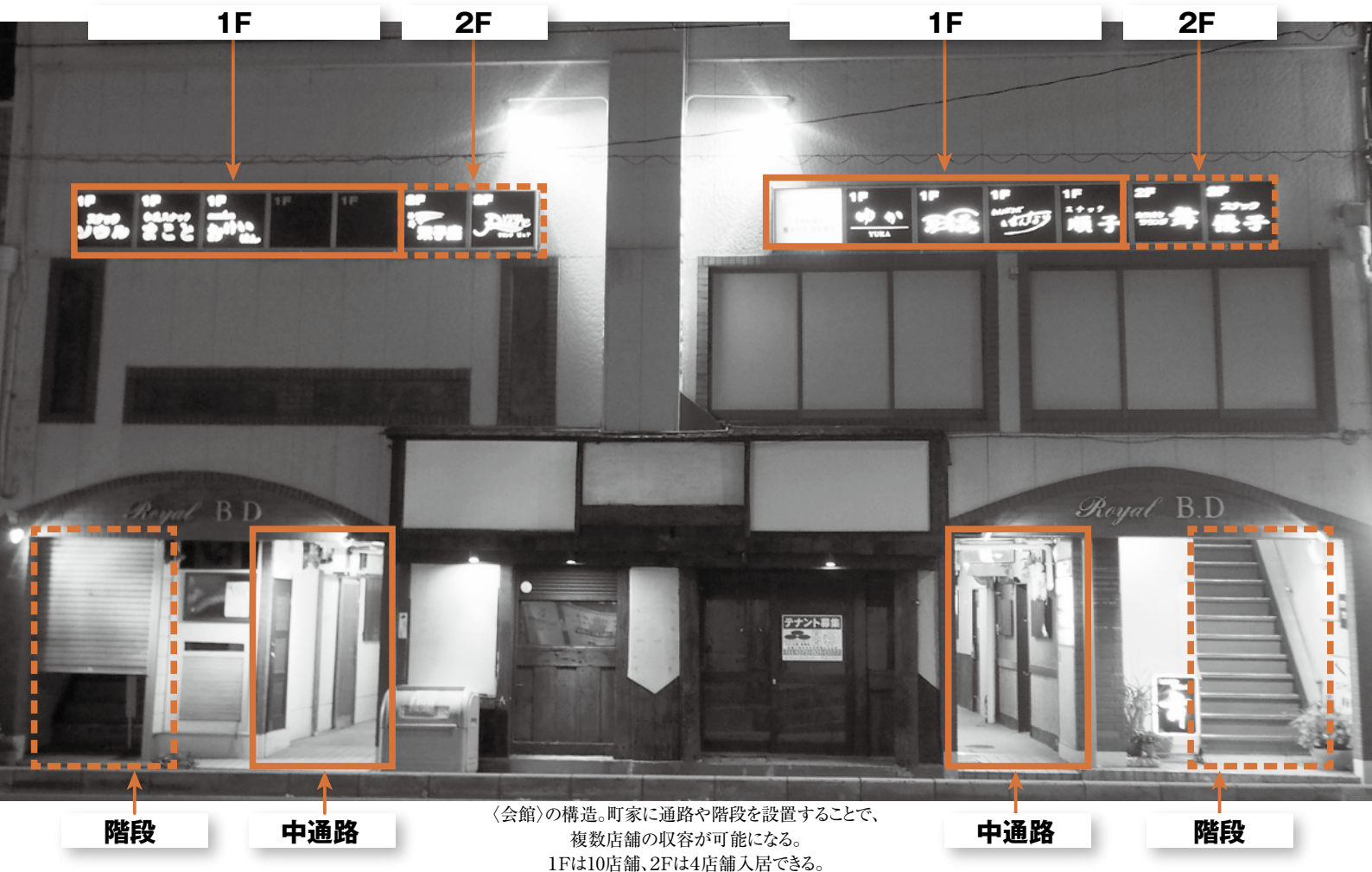
舗で若い女性が独り呑む姿も珍しい光景ではなくなってきた。

〈会館〉と称する飲み屋の集合建築は、2015年11月末現在、京都の中心市街地だけでも60件を超えている。けれども、メディアに登場するごく一部の〈会館〉を除くと、観光客はもちろん、地元の人々の目に入ることも少ないのではないだろうか。〈会館〉という建築とその呼称は、京都に固有というわけ

ではないものの（大津市・大阪市・神戸市などにも分布している）、かといって一般に馴染みがあるわけでもない。〈会館〉のように特定の機能の集積する建築空間を考えると、たとえばオフィスビルや集合住宅、あるいはスナックやクラブの同居する雑居ビルなどが想起される。このとき、京都の〈会館〉に関して注目すべきは、例外は少なからずあるにせよ、本来は商家や住



京都市西院にある「折鶴会館」。複数の飲食店が入居する、〈会館〉と呼ばれる集合建築の典型例だ。



〈会館〉の構造。町家に通路や階段を設置することで、複数の店舗の収容が可能になる。1Fは10店舗、2Fは4店舗入居できる。

宅として使われてきた低層の木造家屋

（いわゆる「町家」）が転用されている、という事実にはならない。1階部分に通路を通し、2階へは階段を備え付けることで、商家であったひとつの建物の内部に、複数の店舗を収容することが可能となる。その結果、複数の飲み屋がひとつ屋根の下に集まり、路地裏や横丁にも似た独特の建築空間、あるいは「飲み屋アパート」とでも称すべき建築形態が生み出されるのだ。

京都市中京区にある、ひとつの《会館》を参考に見よう（31頁下）。ファサードの2階部分に設置された看板の数から、1階に10店舗、2階に4店舗人居できることがわかる。建物の両端に茶色の破線で示した部分は、上階への階段である。その内側の実線部分は、中通路の位置を示している。この《会館》もまた、町家を転用した物件で、階段と通路とによって内部空間の分割が可能となったわけだ。

このように《会館》とは、中通路と2階への階段を設置することで、旧来の町家を効率よく転用した建築と位置づけられよう。実のところ、冒頭で取り上げた「折鶴会館」は、《会館》としては京都で唯一の平屋建てであり、また著名な「四富会館」も、町家と土蔵を複合的に転用した、他に例のない規模であることから、いずれも例外的な存在である。逆に、そのような形態と規模であるからこそ、メディアの注

特集／昔の暮らし方



目度も高いのだろう。

《会館》の出現とひろがり

では、飲み屋の集合建築としての《会館》は、いつ、どこで成立したのだろうか？ 詳細は省くが、京都では最初となる昭和31（1956）年発行の『住宅地図』を中心に、諸種の資料・地図類を検討して明らかとなるのは、1955年を前後する1、2年のあいだに、「西木屋町」と通称される街区に発生した、ということである。西木屋町とは、南北を四条通と三条通に、東西を高瀬川と河原町通とに囲まれた、いまま変わらぬ夜の街だ。

各年版の『住宅地図』にもとづいて、《会館》の立地件数を5年ごとに集計してみた（Chart）。それによると、期間別の最多は1961～1965年の41件、次いで1981～1985年期の23件、1976～1980年期の21件、1971～1975年期の20件、1996～2000年期の10件、2006～2010年期の2件、2011～2014年期の0件と続く。

昭和60（1985）年までは、各期平均約23件の《会館》が誕生し、一貫して累積傾向にあることがわかる。ところが、バブル経済を境に潮目が大きく

く変わり、成立数は激減、既存のストックも取り壊しが進んで、《会館》は減少へと転じたのだった。

結果だけを見るならば、戦後京都に登場した《会館》は総計で148件である。150件近くの《会館》が成立したとはいえ、それが市街地にまんべんなく立地展開したわけではない。では、どのような場所に立地したのか？

《会館》の分布を整理したのがChart 2である。これによると、四条河原町の交差点を中心とした商業地区（とりわけ東部）と、歓楽街である西木屋町、そして西木屋町に接続した花街の《先斗町》、八坂神社の近傍にあって同じく花街の《祇園東》界隈に顕著な集積がみられた。ところが、同じ市街地東部でも、これら繁華街の南側（具体的には五条通以南）と北側（具体的には御池通以北）には、まったく立地していない。つまり、旧来の繁華街とその周辺に集中したことになる。《会館》は立地を選ぶのだ。

市街地の西部に目を向けると、西大路通を軸線として北は金閣寺付近、南は八条付近まで分散的に立地しているが、そのなかで複数の《会館》が集まっているのは、「折鶴会館」の位置す

が入居していたのは、実のところ、元お茶屋を改造した「鴨川会館」ならびに「先斗町会館」であった。《先斗町》には、隣接する西木屋町の影響を受けて、昭和34（1959）年ごろから《会館》が登場し、累計で11件立地している。《先斗町》以上に歓楽街化したのが、同じ花街の《祇園東》である。「会館

る西院付近だけであった。市街地中部（具体的には堀川通）についても、北は北大路通から南は七条通まで分散しており、同じく複数の《会館》が立地したのは四条大宮付近だけである。西院も四条大宮も、阪急京都線の駅を中心にした交通の結節点である。

集合建築としての《会館》は、最初期には発祥の地である西木屋町とその周辺で集積が進んだ（全期間を通じて34件立地）。その後、近接する花街の《先斗町》へと波及しつつ、最盛期の後半には《祇園東》周辺へと集積スポットを移し、あわせて繁華街の周辺や交通の結節点にも展開したのだった。

花街の変容と《会館》の進出

1960年代のすぐれた文学的ガイドブックである『京都味覚散歩』（白川書院、1963年）のなかで、著者の白井喜之介は、「近ごろは、祇園でも先斗町でもお茶屋や芸者の数は盛時の半分に近くなり、斜陽の感が深い」、あるいは「祇園や先斗町などの色町は、昔に比べて半分ぐらいに数が減ったが、反対にキャバレーやバーはなかなか数がふえている」と指摘している。

白井が名指しした《先斗町》については、「この通りも近代化の波におされバーのネオンがふえた」（『京都年鑑1963年版』163頁）とか、ある

式のクラブやバーが激増し、他の花街とはまったく違った町に変わって」しまい、「歓楽街としての様相が濃く」なったのだった（『京都年鑑1972年版』175頁）。《祇園東》に立地した《会館》は18件、そのうち実に11件の従前の用途がお茶屋であった。

Chart 1

京都における《会館》数の推移

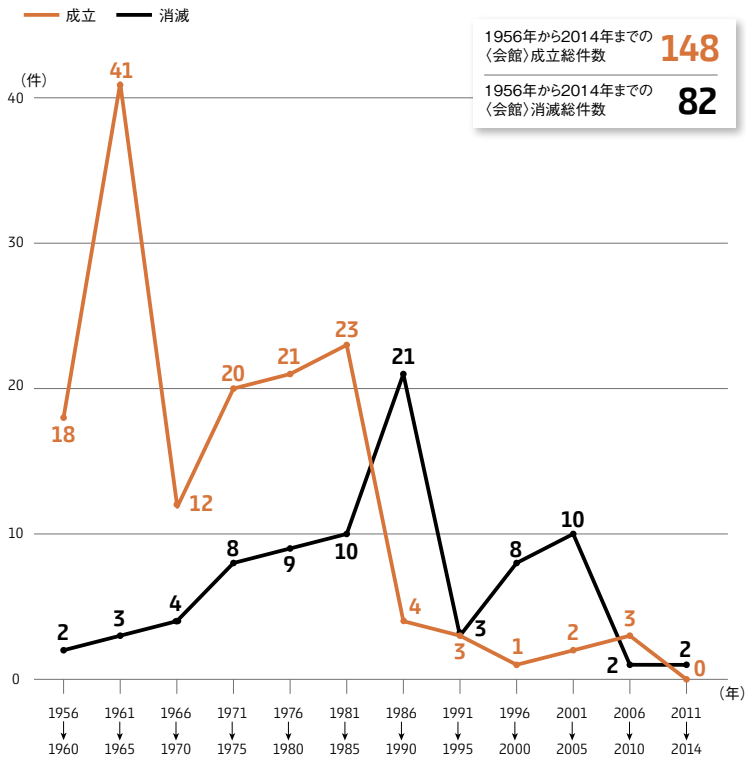
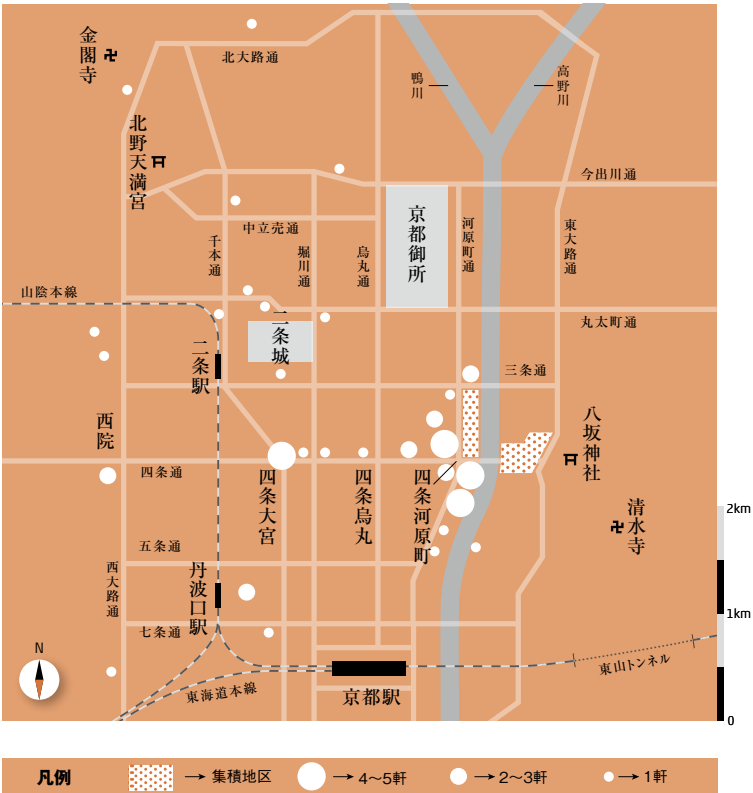


Chart 2

京都市内の《会館》の分布（1956～2014年）



*《会館》は50年代以降に発生するため、1951年当時の地図を使用している。



1960年代の先斗町。
右奥に「鴨川会館」、
左奥に「先斗町会館」がある(上写真)。
茶色部分の拡大図(下写真)を見ると、
右は「CLUB園」「グリル／ビヤホールタカラ」
「BARレイ子」「BARえりか」「BAR酔族館」、
左は「バーパルル」「バー千早」
「クラブ山脈」「クラブヤマ」という
看板がある。

都市の無意識

——《会館》の
立地と空間性

以上に概観したように、京都の《会館》は特徴的な立地パターンを有している。それは、二つの集積地区——西木屋町と《祇園東》——に示されるように、それぞれ周辺域を含む繁華街と花街であり、もうひとつは交通の結節点であった。同種のサーヴィス業や類似する複数の店舗（そのほとんどは飲み屋である）がひとつの建物に共存することから、集客のために交通の利便性や歓楽街のような周辺環境が必要条件となり、おのずと立地を選ばざるを得ない。

ここで重要なのは、累計で約150件、現在でも約60件の《会館》がある

路地と《会館》の社会・空間的な類縁性は、そもそなぜ京都に《会館》が多いのか、という理由とも関わってくるかもしれない。戦災が小さかった京都では、低層木造建築の町家が規模にストックされた。戦後、強制的な建物疎開の跡地を除くと、既成市街地における大がかりな（再）開発事業は実施されないまま、近代的な都市の空間構造が現代に引き継がれている。

その結果というべきなのであろうか、復興期・高度成長期を通じて空間需要が高まるなかで生まれたのは、既存の空間を細分化して利用するという発想であった。通常、空間需要に対応するためには、土地利用の高度化（建物の立体化）を進めるか、土地利用を外延的に拡大するほかはない。事実、他の大都市は一樣にその方向性を取った。そうしたなかで、「古都の呪縛」というわけではないにせよ、町家を壊すことなく細分化して空間需要に応じてきたことは、たんなる発想の転換というよりも、むしろある種の空間発明と呼ぶほうがふさわしい。そこには、「どうなぶつても（どのように手を加えても）構わない」という町家所有者の意識や現実の路地空間のありようのみならず、たとえば借家・間貸しといった文化制度、あるいは脱花街化する遊興の志向性なども織り合わされて影響を及ぼしたに違いない。

《会館》という京都固有の建築に具現

にもかかわらず、それらはなかば隠れこもった存在であることだろう。《会館》は、目的を持った来街者か、あるいは来店者にしか認識され得ないような立地と外観を呈している。それをミクロ地理的に見るならば、（関西の言葉を用いて言う）いわゆる表通りの「通り筋」ではなく、裏通りや路地奥に位置しているのだ。

象徴的なのは、《会館》の発祥地である西木屋町そのものが、空間的には「裏町」であるということだ。交通量の多い表通りには、一般の商店が建ち並ぶ。《会館》へ行くためには、路地を入ったその先に、繁華街の懐へと潜り込むように歩を進めなければならない。《祇園東》のような花街もまた、関連する営業が表通りでは禁じられていたため、街それ自体が裏町としてつ

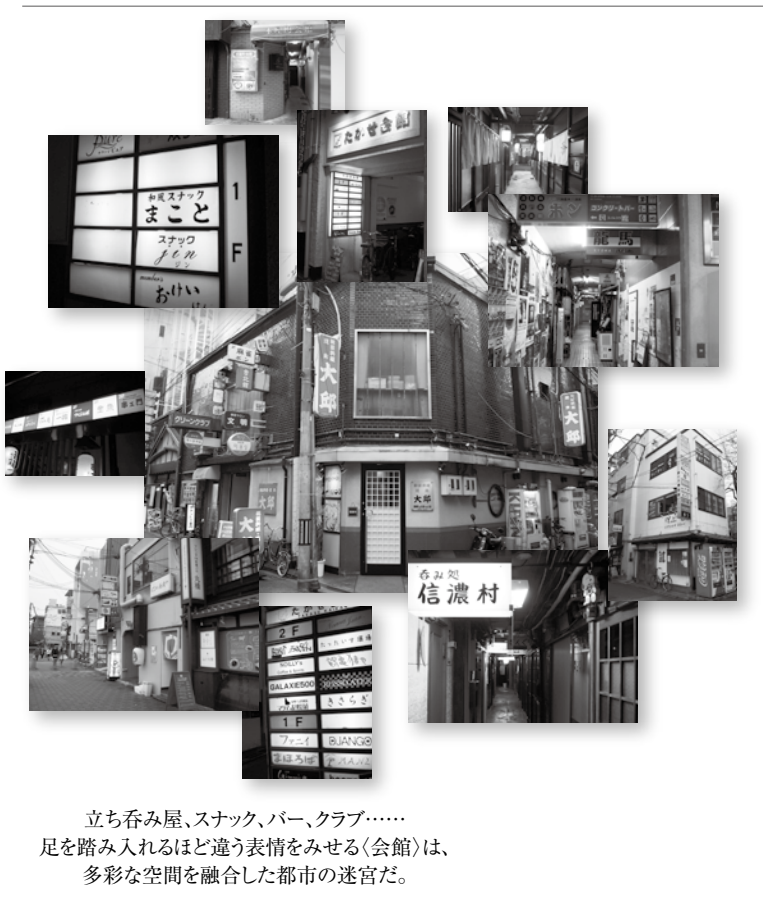
くりあげられ、その引きこもるようなお茶屋の立地を《会館》が受け継ぐのである。

観光客をはじめとする来街者が目にするのは表通りであり、多少猥雑であつたり、いかかわしなかったり、あるいは妖しさを醸す《裏》の空間を体験することは少ないだろう。通りすがりの来街者には触れることのできない空間性、あるいは固有の仕組み・制度を具備しているのが花街や裏町であるとすれば、わたしたちはそれを隠喩的に都市の「奥ゆき」として見立てることができるかもしれない。

実際、《会館》もまた、隠喩以上の「奥ゆき」がある。というのも、本稿の冒頭でわたしたちは、《会館》を「中通路と2階への階段を設置することで、旧来の町家を効率よく転用した建築」とだ

した空間的想像力は、バブル経済を契機として急速に萎んでゆく。バブル期の終末、作家の邦光史郎は、「現在京都は古い町家をこわしてペンシルビルやマンションを建てる、まるで嵐のよ

喪失』『日本経済新聞』1990年4月12日夕刊」と予測してみせた。前述のChart 1に示された趨勢変化が、邦光の観察した「京都こわし」の一面を捉えているとするならば、スクラップ



立ち呑み屋、スナック、バー、クラブ……
足を踏み入れるほど違う表情をみせる《会館》は、
多彩な空間を融合した都市の迷宮だ。

うな古都こわしの渦中にある」と述べ、「紅殻格子に飾られた京の町家と葺の波といった京都の景観は、今後数年足らずで、貧弱きわまりないコンクリート・ジャングルとなるだろう」（「古都

&ビルドによらない空間用途の変更、あるいは空間の細分化という発想に示された別様の活用方を、いまあらためて評価してもよいであろう。

さて、このように堅い文章で論じて

特集／昔の暮らし



Special Feature / The Power of Traditional Life

しまうと、《会館》の面白さを伝えるどころか、興味を失せさせてしまったのではないかと不安になる。最後にひとつだけ、《会館》の不思議に触れることで、本稿を閉じることにはしたい。《会館》を観察していると、1階のエントランスに位置する路面店には、焼鳥屋やラーメン店のように、比較的に入りやすい飲食店が入居していることに気づく。そして狭く暗い通路の奥、あるいはこれまた暗い階段の上にあるのは、会員制のスナックなど、一見ではどうい馴染むことなどできそうな店ばかりなのだ。

すると、《会館》は都市の無意識を映し出しているようにも見えなくはない。表通りから抜けられるかどうかさえわからない路地へ入る躊躇いを、《会館》の入り口で感覚することもあるだろう。《会館》は、歓楽街の縮図でもあるようだ。

裏町に立地する謎めいた集合建築《会館》——この空間に都市の無意識を読み、都市の智慧を学ぶことも、あながち無駄ではないと思うのである。

Kato Masahito

かとうまさひろ／立命館大学文学部准教授。1972年生まれ。博士（文学）。専門は文化地理学。流通科学大学助教授を経て現職。著書に『神戸の花街・盛り場考』『敗戦と赤線』、共編著に『都市空間の地理学』などがある。



江戸のベストセラー作家、井原西鶴の浮世草子には、現代にも通じるさまざまな教訓が詰まっている。代表作『日本永代蔵』や『世間胸算用』から大阪商人の生活力を物語る一節を紹介し、今を生き抜くための暮らしの知恵を学ぶ。

大阪商人の生活力

西鶴の教訓

中嶋隆
Nakajima Takashi

江戸時代の本屋は、出版総合企業

現代日本の大都会は、東京と大阪である。それに、文化都市京都を加えた3大都市は、江戸時代にも「三都」と呼ばれて繁栄していた。「大阪」と書くようになったのは明治時代からで、江戸時代は「大坂」と表記したので、これから後の文章では基本的に「大坂」と書くことにする。

べて遅れていた重要産業があった。出版業である。自動車や電気製品が主要な工業製品となった現代人の感覚からいうと、たかが出版業と思われるかもしれない。しかし、江戸時代の主要工業製品は、織物と陶磁器、それに本である。織物も陶磁器も大坂ではあまり生産されていない。ということは、大坂には、地場産業が育っていなかったということになる。

楮コシを主原料とした紙、文字や絵を彫る桜の板。これが本作りに最低限必要な物産だが、特に紙は高価な工芸品である。今と比べて、流通商品として重要性が格段に高かった。それに出版業は、版下書き、絵師、彫り師、摺り師、表紙屋等、本が出来るまでの就業人口が多い。

大坂に井原西鶴というベストセラー作家が彗星の如く登場する。それをきっかけにして、大坂の出版業が育っていくことになる。

日本初のベストセラーは、出版文化「後発」都市大坂で生まれた

大坂では、1671（寛文11）年まで本屋がなかった。こういう重要な地場産業が、なぜ欠けていたのかというと、出版先進都市の京都が近くにあったからだ。



「井原西鶴像（模本）」。
当時人気を博した数々の浮世草子は、大坂商人の生活力を今に伝える。

所蔵／東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

ところで、現在の大坂城を建てたのは豊臣秀吉だと思っっている方が多いかもしれない。実は、江戸幕府の2代将軍徳川秀忠が再建したお城が、今の大

坂城である。太閤秀吉の子秀頼と母淀君が死んだ大坂夏の陣で、大坂城は焼失、幕府はその跡に盛り土をして、新たに大坂城を建築した。

城だけではなく、この戦で秀吉の造った大坂の都市基盤が崩壊した。幕府は、この地を天領（直轄地）にして、新たな町割り（都市計画）に基づいたインフラ整備を行った。江戸堀・京町堀・阿波座堀・立売堀など運河を開き、伏見町人を移住させるなどして、都市機能を再生したのだ。

今も昔も、お寺さんには学識豊かな金持ちが多い。1640年代（寛永年間末期）には出そろう京の老舗本屋は、僧や上層町人に、仏書や漢籍類などの書物を売って、経営基盤を固めた。寛

永期の京都では、約百軒の本屋が確認できる。江戸でも、大坂より早く本屋が起業していた。1650年代（明暦・万治ごろ）には本屋が存在した。大坂より約20年早い。

そういう出版文化の「後発」都市大

坂で、西鶴『好色一代男』が刊行され、ベストセラーとなった。1682（天和2）年のことである。

現代では、大出版社が、これぞと思う本の装丁や広告に金をかけ、小売り書店の目につきやすい棚を確保して、資金力でベストセラーが創り出される場合が多い。そうかと思うと、書店とコネもなく宣伝費もかけられない中小出版社の刊行物が、徐々に部数を伸ばし、ある時点で爆発的な売れ行きを見

せる場合も稀にある。

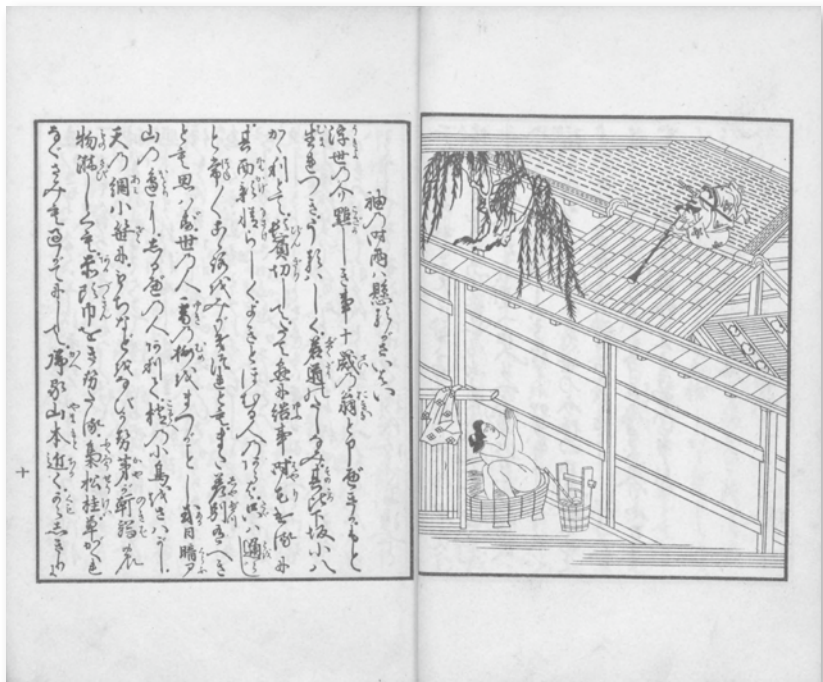
『好色一代男』は後者のケースだった。なにしろ、この作品は大坂で出版された最初の小説である。「荒砥屋孫兵衛」という本屋も『好色一代男』しか刊行物が確認できない。それが、大坂だけではなく、江戸でもブームを起こした。西鶴自身が驚いたか、「してやった」と思ったのかは分からないが、当時の出版・流通の常識をくつがえした事件だった。

メディア・ミックス戦略の先駆者

西鶴の本業は俳諧師である。大阪市天王寺区の「生玉さん」（生國魂神社）の境内に西鶴の座像がある。髪を剃っているので、お坊さんかと思った方もいるかもしれない。半分は当たっているが、厳密にいうと違う。

西鶴34歳のとき、25歳の妻が3人の子を残して病没した。西鶴は、まもなく法体はったいしたのだが、僧になったわけではなく、家業をやめて隠居したのだ。再婚はしなかった。家業をやめたといっても、分かっているのは大坂の商人だということだけで、何を商って、どのくらいの金持ちだったのか、きちんとした資料が残されていない。

妻が死んだあと、1675（延宝3）年に『俳諧独吟一日千句』という俳諧書を出版した。これは、575・77・



井原西鶴「好色一代男」巻1・3「人には見せぬ所」より。

主人公の世之介が9歳のとき、
屋根の上から遠眼鏡で、
行水する女を覗いている場面。

所蔵／国立国会図書館



575・77…と句を連ねて、1日で1000句を詠んだ追善集。妻を追善したという点では日本で最初の句集である。何よりも驚くのは、86・4秒に1句の割で句を作ったそのスピードである。

スピード重視の俳諧は「**矢数俳諧**」に発展する。この俳諧は、観客の前で、1日に何句詠めるかを競う俳諧だから、今の俳句とは作り方が違う。

西鶴は、1600句（1句、54秒平均）、4000句（1句、21・6秒平均）を、生國魂神社で成功させた。両方とも、観客の前で興行したのだから、今でいうイベントである。詠まれた句は、『西鶴俳諧大句数』（1677「延宝5」年刊）『西鶴大句数』（1681「延宝9」年刊）という本になって出版された。4000句のときには、興行スタッフが55人、観客は数千人に及んだと記録されている。

周到な準備と事前の宣伝で「矢数俳諧」をイベント化する。成功したあとには、観客の口から、大坂発の噂が地方に伝わっていく。西鶴自身も地方俳壇の有力者に出した書簡で噂の種を自ら蒔き、自己宣伝につとめる。さらには、このイベントを本にして売る。

こう考えると、西鶴の俳諧活動は、イベントと出版とをコラボしたメディア・ミックスそのものだといえる。現代人によくみられる自分の能力に枠をはめてしまう考え方をしない西鶴は、

常識をくつがえす発想と実行力を兼ね備えていた。

年相応に稼ぎ、遊べ

そういうベストセラー作家西鶴だから、日本で最初の経済小説『日本永代蔵』や、低成長時代の庶民生活を笑いで包んだ名作『世間胸算用』を世に残すことができた。ふたつの作品に共通するテーマは、商人の生活力である。大坂人西鶴は、大坂で生きている人々が共感するような教訓を述べる。たぶん、現在の大坂人も同じ考え方をするかもしれないが、親から譲られた財産や、働かなくても得られる利息や家賃で遊ぶような、生活力を喪失した若者に対してはきわめて辛辣である。

町人も、親に儲け貯めさせ、譲り状にて家督請け取り、仕にせおかれし商売、または棚賃、貸し銀の利づもりして、あたらし世をうかうかとおくり、二十の前後より無用の竹杖、置頭巾、長柄の傘さしかけさせ、世上かまはず憎上男、いかにおのが金銀つかうてすれぼとて、天命を知らず。（『日本永代蔵』巻4・1）

町人にも、親が儲けた金を貯蓄した家督を遺言状で譲り受けたり、代々続いた商売をただ守るだけだったり、家賃や貸し銀の利息を計算したりして、苦勞もせずに世をうかうかとおくる者がいる。まだ二十歳前後なのに隠居して、必要のない竹杖に置頭巾、供の者に長柄の傘をさしかけて外出する。世間の評判も気にかけないで、こんな身分不相応なことをする奢り男は、たとえ自分の金銀を使っですることだとしても、天命を知らない、けしからぬやつというのだ。

蓄財と消費、勤勞と娯樂とが程よく均衡しているというのが、このころの商人の理想的な生活だった。働きすぎも遊びすぎも、生活力を奪ったのだ。要するに、次のように生きなさい、ということになる。

人は四十より内にては世をかせぎ、五十から楽しみ、世を隙になすほど寿命薬はほかになし。（『西鶴織留』巻5・1）

人は、四十歳より前には懸命に

かせぎ、五十歳から楽しみをきわめて楽隠居するほど、寿命を延ばす薬は、ほかにない。

儲かったら、人を育てよ

若いときに苦勞して稼ぐのは、自分のためだけではない。西鶴は、次のように述べている。

人は十三歳まではわきまへなく、それより二十四五までは親の指図を受け、その後は我と世を稼ぎ、四十五までに一生の家をかため、遊樂することに極まり。なんぞ若隠居とて男盛りの勤めをやめ、大勢の家に暇を出だし、外なる主取りをさせ、末を頼みしかひなく難儀にあはしぬ。町人の出世は、下々を取り合せ、その家をあまたに仕分くるこそ親方の道なれ。（『日本永代蔵』巻4・1）

人は、十三歳まではまだ子供なので分別がないが、その歳から二十四、五歳までは親の指図を受けて商売を学び、その後は自分の才覚で金を稼ぎ、四十五歳までに一生困らぬように家業を確実にして、おいて、それから遊樂することが、最も理想的な生き方である。

分け」は、大坂商人の生活力が生んだ知恵だったと思う。

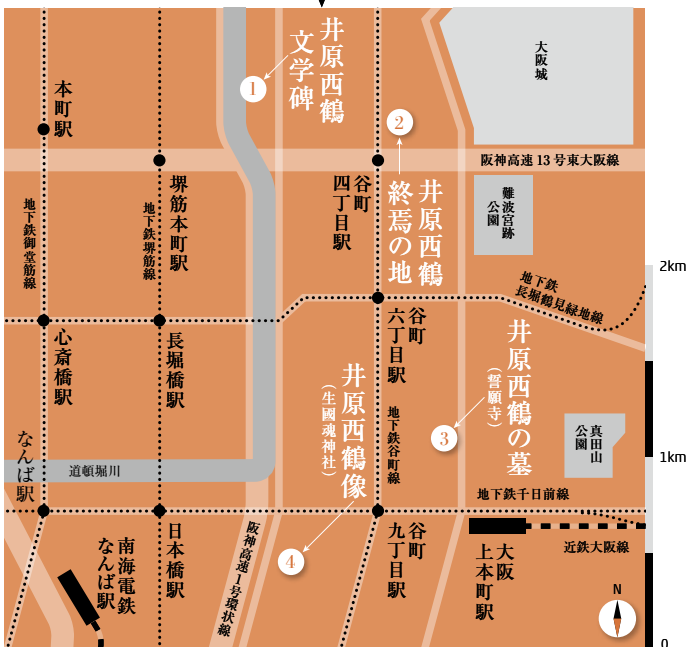
Nakajima Takashi

なかじまたかし／1952年、長野県生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。早稲田大学教育学部教授。博士（文学）。著書に『西鶴と元禄メディア』（NHK出版／笠間書院）、『西鶴と元禄文芸』（初期浮世草子の展開）（若草書房）、『西鶴に学ぶ 貧者の教訓・富者の知恵』（創元社）、小説『はぐれ雀』（小学館）など。小説『廓の与右衛門 控え帳』（小学館）で第8回小学館文庫小説賞を受賞。

井原西鶴ゆかりの地をめぐる大阪史跡案内



大阪



1 井原西鶴文学碑
石碑には『日本永代蔵』の一節が刻まれている。



4 井原西鶴像
西鶴は当地で一昼夜独吟4000句の矢数俳諧に成功した。



3 井原西鶴の墓
1693（元禄6）年、52歳で病没した西鶴はこの地に眠る。

文学碑から墓まで、西鶴の足跡をたどり直せば、各所に刻まれた記憶から忘れられた当時の物語が甦る。



Special Feature The Power of Traditional Life Part 7

暮らしの 知恵を 考えるための 10冊

昔の暮らしを見つめ直した本号の特集から、「これからの暮らし」のヒントは見つかったでしょうか。老舗企業が示した守ることと挑戦すること、再現された江戸時代の町並みを、見て、聞いて、触って実感することなど、現代の暮らしに反映できることは、まだまだたくさんあります。そういった、見過ごしていた「財産」に気づくための、ヒントとなる10冊を選びました。

Number
5

『逝きし世の面影』
渡辺 京二著
平凡社ライブラリー／2005年

Number
4

『百年続く企業の条件
老舗は変化を恐れない』
帝国データバンク史料館・産業調査部編
朝日新書／2009年

Number
3

『日本人の心を解く
夢・神話・物語の深層へ』
河合 隼雄著
岩波現代全書／2013年

Number
2

『なぜ名経営者は石田梅岩に学ぶのか?』
稲盛和夫氏はじめ、多くの経営者も注目する江戸時代の思想家・石田梅岩を「江戸時代のドラッカー」と称し、その考えの現代性に着目するビジネス書。「人間の本性とは何か」を問いつつ、「勤勉」「正直」など、平易な言葉で商いを語った梅岩の教えこそが、日本の近代化や驚異的な戦後復興の土台となったと説く。
森田 健司著
ディスカヴァー・トゥエンティワン／2015年

Number
1

『大阪暮らしむかし案内』
江戸時代編
——絵解き井原西鶴——
井原西鶴の浮世草子とその挿絵をもとに、「絵解き」の手法によって江戸時代の庶民の生活や人間模様を生きたきと描き出す、むかしの暮らし案内書。原文と現代語訳、絵解きを巧みに交えながら、お金の話から四季の暮らし、男女の色恋まで、大阪のかつての文化を豊かに読み解く。「むかし案内」シリーズ第6弾。
本渡 章著
創元社／2012年

Number
10

『近代文明はなぜ限界なのか
人類を救う哲学』
揺るぎない信念を持つ経営者と、独自の境地を開く哲学の泰斗が、経済成長至上主義の次に来るべきものを語った対論。人間の持つ根源的な可能性を信じつつ、「進歩」から「循環」へ、「憎しみ」から「慈悲」へと、人びとの意識が転換することが大切であると説く。「新しい文明の創造」を探求した警世の書。
稲盛 和夫・梅原 猛著
PHP文庫／2011年

Number
9

『忘れられた日本人』
著者は「旅する巨人」と言われ、日本中をくまなく歩いた民俗学者。膨大な記録と写真群は、日本人の過ごした豊かな時間に満ちていると評される。本書は辺境の地で黙々と生きる日本人の存在を、歴史という舞台に浮かび上がらせた宮本民俗学の代表作。確かにあった暮らしの文化を再確認するに最良の書だ。
宮本 常一著
岩波文庫／1984年

Number
8

『風姿花伝』
世阿弥が、亡き父親阿弥の教えに基づき著した本書は、能楽の優れた芸術論であり、後継者に伝授する体系をまとめた理論書でもある。「初心忘るべからず」などの言葉から見る役者の心構え、年齢別の教育論、役別の演技論、能の本質たる「花」の把握など、現代の人材育成にも通じる世阿弥の視点を感じ取れる。
世阿弥著
岩波文庫／1958年

Number
7

『実見 江戸の暮らし』
現代日本に生きる私たちの日常は、「昔」とどのくらい繋がっているのか、あるいはかけ離れているのだろうか。本書は名所図会や絵草紙をはじめとした図版を豊富に使い、江戸庶民の実生活を解く。食や着物、お金、時間などをキーワードとして章立てし、目で見て「昔の暮らし」を追体験できる好著。
石川 英輔著
講談社文庫／2013年

Number
6

『都市のドラマトウルギー
東京・盛り場の社会史』
都市を、「場所」としてではなく、作り手と受け手の間でコミュニケーションが交わされる「出来事」「劇場」と捉え、以後の都市論、文化研究に影響を与えた一冊。作り手の一方的な押し付けではなく、盛り場に集まる人びとが織りなすドラマを含有してこそ、都市のダイナミズムは生まれることを教えてくれる。
吉見 俊哉著
河出文庫／2008年

Number
5

『逝きし世の面影』
幕末・明治年間の来日外国人による記録を収集・精査することによって、西洋化以前の日本の在りし姿を鮮明に描き出した一冊。私たちが失ったものとは、日本の近代化とは何だったのか。信仰から性、労働、子どもの世界まで、異邦人の視点から先入観を介さずに捉えられた日本文明の豊かさが今、驚きとともに甦る。
渡辺 京二著
平凡社ライブラリー／2005年

Number
4

『百年続く企業の条件
老舗は変化を恐れない』
日本でひととき強い存在感を示す「老舗」。その正体に迫るコンパクトな一冊。企業情報の専門家が、財務、歴史、社訓などを徹底分析。踏襲することと挑戦することを、慎重に、かつ大胆に選別する老舗企業の姿勢を浮かび上がらせる。老舗が今に伝えることとはどのようなものなのか、その秘密をたどる。
帝国データバンク史料館・産業調査部編
朝日新書／2009年

Number
3

『日本人の心を解く
夢・神話・物語の深層へ』
日本におけるユング心理学の第一人者が、日本の神話や古典から、日本人の心の深層に迫る。時空を超え死後の世界をも「夢」とする『宇治拾遺物語』、男女の性役割を交換する『とりかへばや物語』など、古典に描かれてきた日本人の心を解き明かし、現代に生きる日本人のあり方を問い直す一冊。
河合 隼雄著
岩波現代全書／2013年

Number
2

『なぜ名経営者は石田梅岩に学ぶのか?』
稲盛和夫氏はじめ、多くの経営者も注目する江戸時代の思想家・石田梅岩を「江戸時代のドラッカー」と称し、その考えの現代性に着目するビジネス書。「人間の本性とは何か」を問いつつ、「勤勉」「正直」など、平易な言葉で商いを語った梅岩の教えこそが、日本の近代化や驚異的な戦後復興の土台となったと説く。
森田 健司著
ディスカヴァー・トゥエンティワン／2015年

Number
1

『大阪暮らしむかし案内』
江戸時代編
——絵解き井原西鶴——
井原西鶴の浮世草子とその挿絵をもとに、「絵解き」の手法によって江戸時代の庶民の生活や人間模様を生きたきと描き出す、むかしの暮らし案内書。原文と現代語訳、絵解きを巧みに交えながら、お金の話から四季の暮らし、男女の色恋まで、大阪のかつての文化を豊かに読み解く。「むかし案内」シリーズ第6弾。
本渡 章著
創元社／2012年

まるしまかずひろ／国文学研究資料館研究部特任助教。2000年慶應義塾大学文学部史学科卒業。05年、同大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。08年「戦国期武田氏権力の研究——取次論の視座から」で博士（史学）。専門は戦国大名論。著書に『真田四代と信繁』（平凡社新書）、共編著に『武田氏家臣団人名辞典』（東京堂出版）など多数ある。

私は、2016年大河ドラマ『真田丸』（三谷幸喜脚本）の時代考証を担当している。今回は、全編にわたり三人のチームで考証を行うという体制をとっている。私はまだ40にもなっていないから、考証者としてはかなり若い部類に入るだろう。残りの二人（平山優・黒田基樹両氏）は、私の約一回り上だが、普段から親しくさせていただいている関係である。

時代考証とはどういう仕事か。脚本家を書いた台本に対して、事実関係の誤りを正したり、言葉や人びとの考え方を当時のものに近づけていくことが基本である。もともと、江戸時代の講談などで作られたエピソードであれば、有名なものは許容する。

第一稿の台本では、登場人物の台詞が現代語に近い。これを当時の会話らしく直していく。近現代の言葉を排除して、できる限り戦国時代の言葉に置き換える。とはいっても、視聴者が聞いて分かなければ台無しだから、あまり難しい言葉は使えない。やむを得ず、現代語のままにすることもある。これはNHKのスタッフに専門家がいたのでお任せすることが多いが、こちらでも手を加える。たとえば「眼鏡に適う」は却下。眼鏡は伝来していたが、大名クラスしか手にできない貴重品なので、慣用句になっているはずがない。会話も身分差を踏まえて、敬語をどう使うか考える。尊称でいうと、信長なら「上様」、守護職を持つ戦国大名である武田勝頼や上杉景勝なら「御屋形様」、そうでない徳川家康や真田昌幸は「殿」とする。登場人物の座る場所も、身分を考えて指示をする。番組中で使われる書状や地図などの小道具の準備も手伝う。

しかしあくまでドラマだから、史実通りには話が進まない。省略もあるし、



真田信繁像

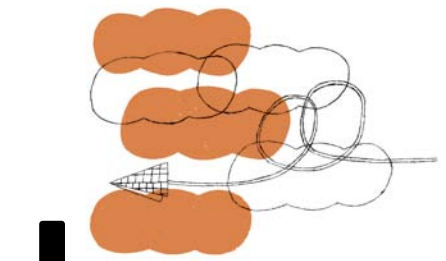
所蔵／原昌彦氏 画像提供／真田氏博物館

は、この部分である。もともと、あまりに現代人の感覚からかけ離れてしまうと視聴者がついていけなくなるから、スタッフと繰り返し議論する。

ドラマ序盤のキーワードとして「国衆」とよばれる、戦国大名に従属する自治領主が出てくる。真田家も国衆の一つで、戦国大名とは違う目線から戦国時代を見てもらおうという意図がある。また、村同士の争いの場面もあるが、戦国時代の百姓は、刀と脇指を帯びて武装している。だから農具ではなく、槍などの武器で戦わせるようお願いする。

さらにいうと、主人公である真田信繁（幸村）は、豊臣秀吉に気に入られていくのだが、だからといって、寧（北政所）や茶々（淀殿）といった秀吉の妻の生活空間である「奥」に成人男性を入らせてはならない——。こうしたことを指摘していくのである。

ようするに、三谷さんが語りたいテーマを、戦国時代の話として違和感がないようにサポートするのが仕事なのだ。今回の時代考証は、NHK側との連携が、チームとしてうまく機能しているように思う。後は、クランクアップまで走り抜けるのみである。



その1

米国イノベーション 地域における イノベーション・サポート システムの特徴とその変化(後編)	44
文／奥田 浩二	44

その2

未来への 記憶を 共有する	48
文／弘本 由香里	48



CEL Insight

Vol.112 March 2016

The Reports from Researchers

持続可能な社会に向けて
CELが発信する情報は、
「エネルギー・環境」「都市・コミュニティ」
「住まい・生活」を
3つの柱に展開されています。

CEL Output

Part 1 / Report by Okuda Koji

Part 2 / Report by Hiromoto Yukari



生活者の意識を探る	第二回 幸せな地域・成熟社会／豊田 尚吾	52
CELからのメッセージ	昔の学びを未来につなげる／小西池 透	56

Illustration by Akiyama Hana

米国イノベーション地域におけるイノベーション・サポート・システムの特徴とその変化（後編）



ベンチャー企業の誕生や成長を支える仕組みはどのようなべきか。

前号で紹介した

米国のイノベーション地域における

基本モデルの変化を踏まえつつ、

日本における起業・創業支援のあり姿を考える。

前号の振り返り

本稿は、米国におけるベンチャー企業の誕生と成長をサポートする仕組み（イノベーション・サポート・システム）の分析を通じて、今後の日本における起業・創業支援のあり様を考察することを目的としている。

前号では、2007年時点の仕組みの基本モデルを提示した。主な特徴は、「各機関を数人で運営し、入居企業数

は各機関10〜20社程度」、「支援対象は商業化段階以降に限定」、そして「主な支援は活動スペースと成長支援サービスの提供」であった。

本稿では、まず近年の変化を概観し、続いて日本における仕組みのあり姿を考える。

近年の変化

ここでは、米国において、この5年程度の間に急成長した2つの仕組みと

近年の変化とそこからの示唆

その背景、そして基本モデルの基となった4機関のその後の状況を紹介する。

《アクセラレータ》

アクセラレータとは、一定期間（通常3〜4カ月）に集中して起業希望者を訓練する仕組みである。代表的なものとして、シリコンバレーのYコンビネーター（Y Combinator）（*1）やコロラド州ボルダーからスタートしたテックスタートーズ（Techstars）（*2）などがある。

0件程度の応募に対して、採択されるのは1%程度である。マスカレンジ（MassChallenge）（*3）のように、コンテスト形式で案件を選別するものもある。

アクセラレータと基本モデルとの主な違いは、「商業化の前段階も対象」、「最初に資金を提供」、「3〜4カ月の集中訓練を無料で実施」している点である。なお、アクセラレータでは利用者から賃料等は取らないので、日々の収入はない。アクセラレータの運営や提供資金の原資は、外部協力者による寄付金が中心となる。

《コンシェルジュサービス》

快適な活動スペースの提供に特化したサービスをコンシェルジュサービスという。これは、ホテルでの顧客サ

ビスになぞらえた命名である。マサチューセッツ州ケンブリッジにあるケンブリッジ・イノベーション・センター（以下、CIC）（*4）が代表例である。提供するの、「共有スペース」「ブース（半個室）」「個室」などの事務所スペースに加え、共同受付や打ち合わせスペース、キッチン、コピー機、ファックスやインターネット環境である。これらの利用は有料であり、入居企業は、使用面積等に応じて毎月定額を支払う。定額なので、入居企業は収支計算が立てやすい。またCICも、（入居状況に応じて）毎月決まった収入が期待できるので事業性が高まり、ストック型ビジネス（*5）としての展開が可能となる。

企業の平均入居期間は、2〜3年である。ただし、入居期間に制限はない

ため、10年を超えている企業もある。CICには2014年時点で600社の企業が入居しており、これは基本モデルの数十倍の規模である。

CICでは、成長支援サービスに替わるサービスとして、多様なプログラムを提供している。例えば、ベンチャーカフェ（Venture Cafe）では、入居企業とベンチャーキャピタルとの出会いの場を創出している。これは、入居企業にとっては投資獲得のチャンスであり、ベンチャーキャピタル等投資家にとっては多くの企業に一度に出会える魅力的な機会となっている。

CICと基本モデルとの主な違いは、「活動スペースに特化」され、「多くの入居企業」があり、そして「事業性を高めている」点である。

ここで紹介した近年の変化の特徴を

まとめたものをChart 1に示す。基本モデルを基準に考えると、近年の変化は、アクセラレータでは研究・アイデア段階という「起業プロセスの初期段階」までカバーし、アクセラレータとコンシェルジュでは共に「活動スケールを大規模化」するものになっている。このような変化の背景には、次のようなことが影響している。

起業活動の活発化：ITインフラの充実や低コスト化により起業への敷居が低下した。さらに3Dプリンターなどの発展・普及により、サービス以外のものづくり分野での起業も活発化した。

IPO（株式公開）件数の回復：リーマンショックで落ち込んだIPO件数が回復し（Chart 2）、ベンチャー投資のEXIT（投資した株式を市場で売

アクセラレータでは、公募で参加者を集め、採択時点で一定の活動資金を支給する。応募時点では、具体的な事業計画などは不要であり、アイデアで構わない。提供する活動資金額は、当初は1〜2万ドル程度であったが、近年では10万ドル程度まで増額されている。なお、この資金と引き換えに起業会社の6〜7%分の株式をアクセラレータに拠出するケースもある。また、訓練期間中は、活動場所やインターネット環境などを無料で提供する。メンターとの相談や各種セミナー（製品開発や事業計画など）、イベント参加も無料である。そして、期間の最後には、デモ・デーが設けられ、投資家の前で事業プランや試作品、デモシステムをアピールし、本格的事業活動のための投資獲得を目指す。

応募者の選別状況は厳しく、100

Chart 1

近年の変化

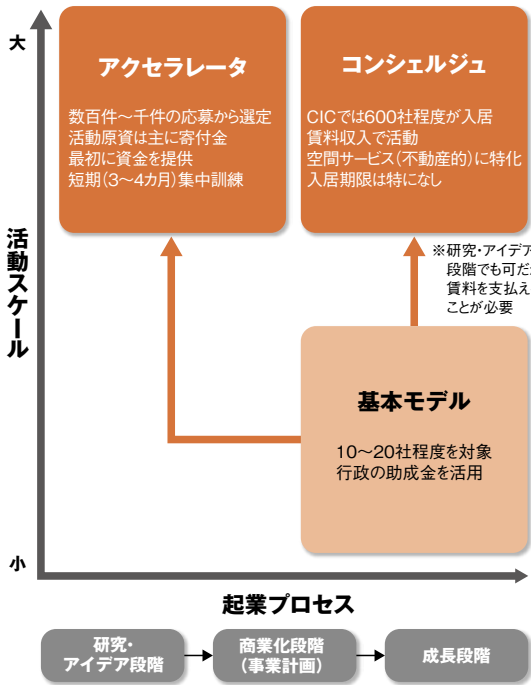
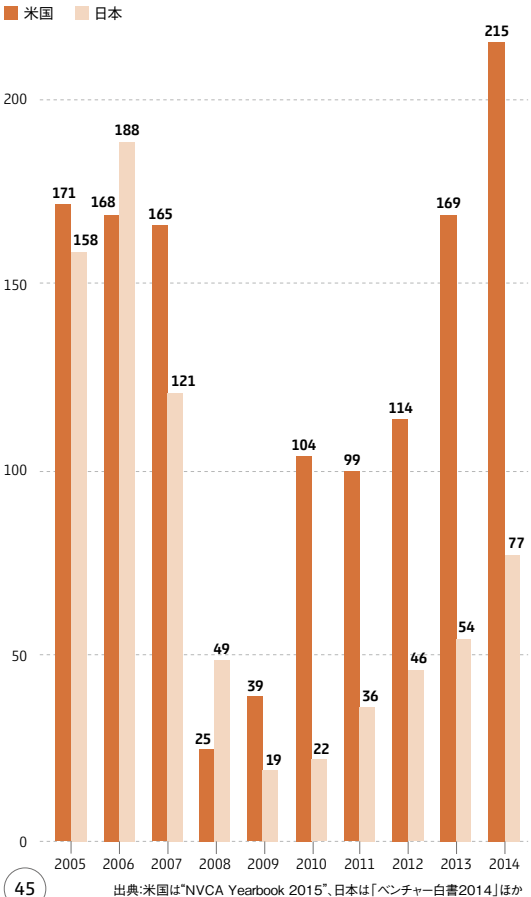


Chart 2

日米のIPO件数の推移



(※1) 同社のホームページを参照のこと。当機関の活動は書籍でも紹介されている。『Yコンビンーター』(ランダル・ストロス著、滑川海彦・高橋信夫訳、2013年[原著2012年]、日経BP社)

<http://www.ycombinator.com>

(※2) 同社のホームページを参照のこと。

<http://www.techstars.com>

(※3) 同社のホームページを参照のこと。米国マサチューセッツ州で2010年に活動を始め、現在はイスラエルや英国にも進出。「IMPACT REPORT 2014」によると、2014年10月時点で4802人の雇用を創出し、設立された企業等の総収入は4億ドルを超える。

<http://masschallenge.org/>

(※4) 同社のホームページを参照のこと。

<http://cic.us>

(※5) 毎月一定の収入が期待できるビジネスをストック型ビジネスと呼び、取引の都度、売り上げが発生するビジネスをフロー型ビジネスと呼ぶ。

(※6) レポート名は“Assessment of Incubator Program”。詳細は下記参照。

http://www3.sanjoseca.gov/clerk/CommitteeAgenda/CED/20110926/CED20110926_d4att2.pdf

(※7) 同レポート8頁の“Overview of Incubator Programs, as of January 2009”の表参照。

(※8) サンノゼ州立大学研究財団(San José State University Research Foundation)の資料によると、2013年の時点でこれらの機関への支援は終了した。

(※9) 現在、サンノゼ市はバイオキューブのパートナーの一員としてのみ名前を残している。

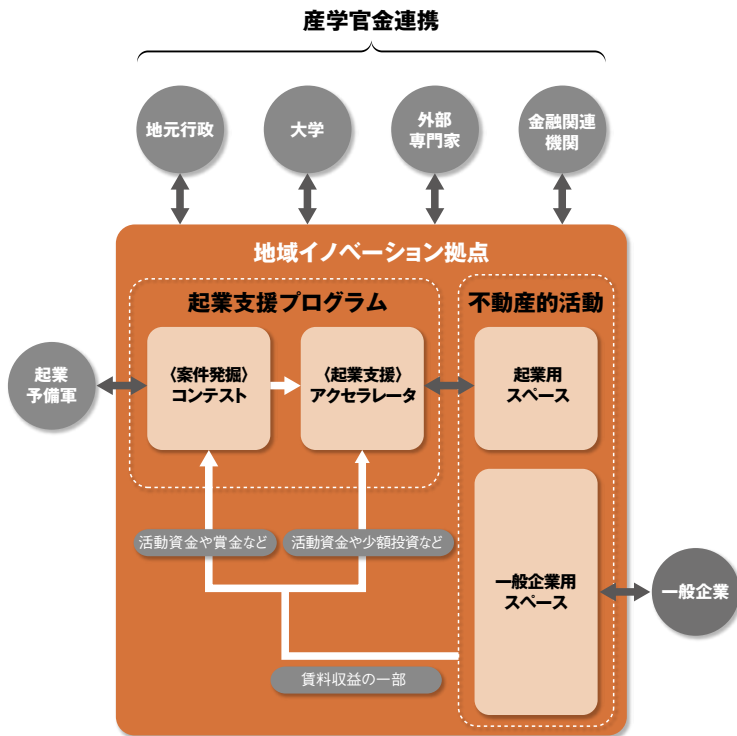
(※10) 起業状況やIPO件数、先行事例の存在や前号で述べた「シリコンバレーの土地・風土」など。

(※11) リサーチパークとは、大学や研究機関などの成果を事業化・産業化する拠点である。研究機関と一般企業が隣接して拠点を設けることが多い。米国におけるリサーチパークの仕組みについては拙稿を参照されたい。「米国における地域イノベーション拠点の分析」『龍谷ビジネスレビュー(第16号)』(奥田浩二著、2015年、1～14頁)

(※12) Chart 3に示すように、ここでは起業支援以外の仕組みも加味している。そのため、起業支援を対象とした「イノベーション・サポート・システム」ではなく、「イノベーション拠点」という表現にした。

Chart 3

地域イノベーション拠点のイメージ



で述べた基本モデルの活動」を展開する。起業者の支払いが発生するのはこの段階からとする。一方、不動産的活動では、一般企業の入居も受け入れることで、安定した基盤収入(賃料)を獲得する。不動産的活動で得られた収益の一部を案件発掘や起業支援活動に充てることで、活動全体の持続性を確保する。加えて、起業者と一般企業との間で協業関係(例えば、事業提携やサービスの売買など)が実現できれば、拠点としての付加価値は一層高まる。

おわりに

筆者は、5年ほど前に、ある会社においてベンチャーファンドの立ち上げ

に奔走したことがある。当時は、起業を取り囲む状況は大変厳しく、残念ながらファンドの設立は叶わなかった。そのような経験から、今日の状況を見ると隔世の感がある。近年、日本においても起業活動は大きく活性化してきた。しかし、今日の状況がいつまでも続くという保証はどこにもない。状況である今だからこそ、環境が変わっても持続できるような活動基盤を構築することが必要ではないだろうか。このような思いから本稿では、米国の状況を分析し、そこから日本における地域イノベーション拠点の仕組みを提案した。本稿が、日本の成長のなかに起業や創業を根付かせるための検討の一助となれば幸いである。

却して収益を得ること)の期待も高まった。

早期支援の必要性…起業が容易になった分、従来のベンチャーファンドの投資を獲得できるところまでの支援(創業期の支援)が求められるようになった。

4機関のその後

基本モデルで分析したサンノゼ市にある4機関(SBC、EBC、USMAC、バイオセンター)は、その後どのようになったのだろうか。これらの機関については、2009年に第三者による評価レポート(※6)が出された。そこでは、累計325社の卒業企業と2615人の雇用者を生み出した成果を評価している。しかし、一方で、サンノゼ市が約2450万ドルを投資したのに対し、卒業後もサンノゼ市に拠点を設けている企業は32社、雇用者数も約540人とどまっていることを指摘している(※7)。つまり、起業支援の成果は生み出しているが、地元地域への貢献(地元での雇用数、卒業後の地元残留数や地元への税収)には課題があるという評価である。

このような状況とサンノゼ市の組織再編などが相まって、結果として、サンノゼ市によるこれらの機関に対する支援は大きく縮小した(※8)。今日、各ホームページを検索すると、SBCは見つからず、EBCはクリーンテック

クオープンという全米レベルの別活動にリンクされている。また、バイオセンターは別機関による運営となり名称も「サンノゼバイオキューブ」に変更された。USMACのみその名前を今日まで残している(※9)。

日本への応用

ここからは、これまでの分析を踏まえて、日本における同様の仕組みの実現について考える。日本における起業支援では、基本モデルにあるようなインキュベーション施設やビジネスプラットフォームのような活動に日本で取り組む動きも出始めている。しかし、日本と米国では、起業の状況が異なる(※10)ので、米国の仕組みをそのままコピーしても日本ではうまく機能しない。そこで、ここでは米国の事例に学びつつ、日本流に加工するためのポイントを示す。

持続的な仕組みを作る…サンノゼ市のケースは、助成金の活用において持続的な仕組みを構築することの重要性を指摘している。助成金を最大限に活用し、できるだけ速やかに成果を出すことは助成金活用者に求められることである。ただし、その助成金がなくなれば、活動自身も白紙に戻るというのはもったいないことであり、助成金の趣旨にも反することであろう。助成金がある間に、足元の成果を出しつつ、将来の活動を持続的に行えるような仕組みを企業やNPOなどが連携しつつ作りあげることが重要である。

案件を広く集める…起業活動を持続するには、継続した案件の発掘が必須である。有望案件を継続的に獲得するには、間口を広げる必要がある。日本ではまだ起業者と投資家との距離が離れているので、コンテストをきっかけとして起業者との接点を作っていくことが有効だろう。コンテストを登竜門として、アクセラレータに有望案件をつないでいく形である。

収益基盤を確立する…コンテストやアクセラレータの運営、そして起業者の支援には資金が必要となる。しかし、コンテストやアクセラレータから収益を得ることは難しい。当初は行政の助成金を活用してもよいが、持続的な活動には安定収入が必要だ。米国のように寄付金を募ることができればいいが、日本では実現が難しそうである。打開策のヒントはCICの事例にある。賃料収入の活用だ。しかし、CICのように数百社も起業者を集めることは難しい。ここでは、産業振興的な機能と不動産的な機能を兼ね備えたりサーチパークのような仕組みと組み合わせることが有効だろう(※11)。

機能をつなげる…日本での起業は、米

国のように成長事例が次々と出るような状況ではない。このような場合、各活動を米国のように個別に展開するのではなく、互いに機能をつなげることで有望案件を着実に成長させるような仕組みが重要となる。案件の発掘を目的とするコンテスト、起業の初期段階を支援するアクセラレータ、そして不動産的なスペース提供という各機能を「つなげる」ことを日本流の仕組みとして提案したい。そして、不動産的活動の収益で前段階の機能を支えることで、持続的な活動が行える仕組みを実現するのである。

このような考えに基づく「地域イノベーション拠点(※12)」の実現イメージを、Chart 3に示す。ここでの拠点とは、特定の機関や場所であってもいいし、いくつかの機関が連携したものでよい。

地域イノベーション拠点では、案件発掘を目的としたコンテストが起業予備軍(起業に関心のある人)との接点になる。地元行政や大学などと連携して案件を集める。コンテスト応募者のなかから有望案件を選別し、アクセラレータで短期集中的に初期の立ち上げを行う。そこでは外部専門家の協力を得るとともに、金融関連機関からの初期投資も募る。アクセラレータを卒業し、成長が見込める事業については、拠点内の起業用スペースで活動(前号

研究レポートその2

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所 研究員

弘本 由香里

未来への記憶を共有する

人口減少にともない社会の変革が求められる今日、都市の在り方もまた再考を迫られている。近世から近代へ、急激な市域拡張が田園を飲み込んで、当時日本最大の都市「大大阪」を生んだ。その変遷に着目する地域の壁新聞『上町台地 今昔タイムズ』の取り組みを例に、これからの都市再編のヒントを探る。

『上町台地 今昔タイムズ』と「大大阪」のフロンティアへのまなざし



身近な暮らしのなかの歴史を将来につなぐ

大阪の歴史の原点ともいえるべき、都心部を南北に貫く上町台地界隈に軸足を置く、筆者も研究活動の一環で発行に携わっている『上町台地 今昔タイムズ』(※1)という、小さな壁新聞がある。発行の趣旨は次のとおり。(長

い歴史のなかで、天災や政変や戦災、著しい都市化も経験してきた地。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってくる。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方(中略)。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに。(後略)地域の方々に貴重な資料やコメントを提供していただき、身近な暮らしのなかにある歴史を共有し、将来につながる種として

いく試みである。2015年は、大阪にとって何重にもシンボリックな年となった。「戦後70年」は言うまでもないが、奇しくも「大坂城落城400年」に「道頓堀開削400年」。さらに大阪市が面積・人口ともに全国最大となった大正末期の「大大阪誕生90年」にも当たった。特定の周年のみに価値があるわけではないが、それを機に日常的に歴史を振り返って考える視点を得ることができ

近世大坂と近代大阪の境目「大大阪」へのまなざし

『上町台地 今昔タイムズ』では、2013年から2015年にかけて近世大坂と近代大阪の境目ともなる「大大

阪」に関連する題材を取り上げてきた。本稿では、都市の将来に向けて、それらの題材を通して得られた視点を紹介したい。

明治22(1889)年の大阪市制施行時、15・27㎢だった市域は、大正14(1925)年の第二次市域拡張で181・68㎢に一気に広がり、当初の約12倍近く、現市域の大半を編入した。

人口の変遷を追ってみると、市制施行時の人口は47万人だが、第二次市域

拡張で約4・5倍の211万人に達している。この時点で大阪市は面積・人口とも全国最大の都市となり、「大東京」が誕生する昭和7(1932)年10月まで「大大阪」と呼ばれた。「大大阪」を生んだ第二次市域拡張が、現在の大阪市の構造を形づくっている。つまり、大阪のまちは、400年前の豊臣・大坂城の落城の後、近世に築きあげられた大坂三郷(北・南・天満)を核としつつ、明治後期から周辺地域

を急速に合併・開発し、近代化のスピードとともに拡張していった二重構造を宿している。「大大阪」という時代を振り返るという営みは、かつて大阪が急成長を遂げ、活気にあふれていた時代を懐かしむ情緒に浸るというよりは、むしろ、将来に向けて、歴史的に二重構造を持つ都市が、自らの特性を再認識する機会となる。今後、人口減少にともなう縮退を余儀なくされていくなかで、中心部と周縁部の役割や関

都市拡大のプロセスをリアルに捉える

近代工業の受け皿となった工場と労働者の住まいや盛り場は、近世大坂の



『上町台地 今昔タイムズ Vol. 1』2013年秋・冬号1面。
記念すべき創刊号は、
鉄道史から見た大阪の都市変遷に着目し、
明治時代の近代化の波を伝える。

周縁部に集積し、交通網の整備に呼応しながら、さらに外側へと広がっていった。「大大阪」の誕生前後に起きた現象は、反転して見れば周辺に広がる数々の村の消失、豊かな田園地帯の市街地化という出来事でもあった。失われた村々や田園は、どんな姿をしていたのか。人々はどんな思いを抱え、変わりゆく風土と対話していたのだろうか。そんな問いが立ち上がってくる。

そこで、大阪の近代の風景に接近していくために、『上町台地 今昔タイムズVol.1』（2013年秋・冬号）では、「鉄道史から垣間見える、近現代・大阪での都市拡大」を取り上げた。都市化の動態を、近代化を支えた鉄路の発達から明快に捉えようとする試みである。明治時代、大正時代、昭和30年代、現代と、四つの時代の地図をベースに、

まちはずれの駅の誕生から、徐々に市街地への侵入、郊外への延伸と、鉄道網の広がりをわかりやすく段階的に描いた。同時に、車窓の風景にまつわる地域の方々の記憶を集め、マクロな都市化の視点とミクロな生活実感の視点を接続し、果てしなく拡張していった市街地の変遷のプロセスをリアルな経験として共有することを目指した。

さらに、都市化の動態をより具体的に捉えるために、関連イベントとして、地理学、建築史、まちづくりの各分野から専門家を招き「都市の広がりのなかに消えたもの・残されたものは？未来は？」と題するフォーラムを開催した（2014年3月）。

まず、立命館大学准教授の加藤政洋氏が「20世紀大阪都市化の空間文化誌」として、中心と周縁のダイナミズ



堤梢次郎「東横堀 丸町の浜にて」大正4(1915)年。
都心部でも川で染物屋が布を洗い、
風が干し場の染め布をなびかせる光景は、
初夏の水都の風物詩だった。



2014年3月に開催された上町台地今昔フォーラムVol.1
「都市の広がりのなかに消えたもの・残されたものは？
未来は？」の様子。右から加藤氏、酒井氏、吉田氏。

ど）を惜しみ、記録を残そうとする考え方がすでに生まれていたことも紹介された。関東大震災による、伝統的な建築や景観の喪失経験も影響しているものと思われる。

さらに、立命館大学教授の吉田友彦氏は、上町台地の東に広がる生野・東成界限の100年を、大正時代に始まる耕地整理と長屋住宅地・商店街の誕生と変化から読み解かれた。時を経て現在の賑わいに至るコアタウンの形成や、新たな世代の商いの展開など、詳細な調査に基づいて店舗の業態や店主の変遷を追い、都市の縁辺部に宿る可能性とまちを更新する力について語られた。

堤梢次郎の画業と 作品に宿る メッセージ

まさに「大大阪」誕生前後のまちと村々の変化の渦中に生き、記録に努めた人物がいた。明治29（1896）年、大阪・旧・鶴橋村味原池近く（現・天王寺区味原あたり）に生まれ、鶴橋・猪飼野界限に暮らして、印刷業を営みながら絵筆を揮った堤梢次郎氏だ。

『上町台地 今昔タイムズVol.1』（2015年春・夏号）では、「文画人・堤梢次郎が見つめた大阪 上町台地をかたどった水辺の風景と土地の記憶」と題して、日本画家・郷土史家として

遂げていくとき。梢次郎氏は、大大阪の表面の華やぎよりも、その繁栄をしっかりと支える生業や交通のありように注意を払い、発展の一方で失われゆく風土を慈しみ、両者を後世に伝えるべき対象と見定めている。さらには、自らの役割をはっきりと自覚して、記録画家として生きる、清廉な決意と郷土への深い愛情が伝わってくる。

近世・近代の日本文化史の研究者で大阪商業大学総合経営学部准教授の明尾圭造氏は、「生業を持ちながら、郷土の研究、作画に余念がなかった梢次郎をみてみると、如何にも大阪的な画家を想起させる。大正期、博覧会に出品を重ね、様々な賞を受けながら、地域の研究や定点作画に喜びを感じる梢次郎は、もはや展覧会への出品とその評価に一喜一憂する画家ではなかった。自らの生涯をかけて、描く（調査する）対象を定めた梢次郎に人生の潔さを感じるのは私だけであろうか」と評している（*2）。

未来への記憶を 呼び覚ます

人がつくるまちや村も、時間軸を持つて眺めてみれば、成長と衰退を繰り返していく、生命体のようなものである。そのような存在であることを前提に、都市の将来を考えていかなければならないのだと、戦災を超えて残され



堤梢次郎「平野川 東成郡鶴橋町の
北端（三枚橋）」大正4(1915)年。
市街化の過程で
急激に失われゆく田園風景を記録した作品は、
忘れられた当時の様子を今に伝える。

品継承者（直系の孫）堤條治氏の快諾を得て実現したものだ。

上町台地の東に広がり実りを運んだ沃野、慣れ親しんだ田園風景が、河川改修、耕地整理、鉄道網の発達とともに、住宅と工場が建ち並ぶまちへと変貌を

（*1）『上町台地 今昔タイムズ』（発行：大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所、企画・編集：UoCoプロジェクト・ワーキング）。プロジェクトの経緯や、発行物のバックナンバー等は、ホームページで公開している。
http://www.ogcel.jp/project/ucoro/event2_kon.html

（*2）明尾圭造氏論稿「絵筆を持った郷土史家 堤梢次郎『あしたづ』第15号（2013年2月、河内の郷土文化サークルセンター）掲載から。

幸せな地域・成熟社会



Toyota Shogo

豊田 尚吾

ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授。大阪ガス㈱入社後、コロンビア大学東アジア研究所フェロー、学習院大学特別客員教授、エネルギー文化研究所研究員などを経て2015年より現職。専門は生活経済学。著作に『地球温暖化とグリーン経済』など。

はじめに

今回のテーマは「幸せな地域・成熟社会」である。しかし、地域の幸せを測るための、全ての人が納得する尺度は存在しない。その地域で暮らす人たちが、自らの生活をよりよいものにする（ウェルビーイングの実現）ために、地域の幸せとは何かを議論し「定義」していくことが必要だとの姿勢を本稿ではとっている（『CEL』110号「なぜ、いま、『幸福感』なのか？」参照）。

今回の調査データ（＊）を用いて、生活者個人の幸福度判断（主観的幸福度）から計算した地域別幸福度の平均値を比較しても、統計的に意味のある地域差は確認できなかった。そもそも幸せな地域

（＊）大阪ガス㈱エネルギー文化研究所が行ったネットアンケート調査「ライフスタイルに関するアンケート」のデータ。約50000人を対象に、2015年2月に実施。調査主体は㈱マクロミル。

その1 高齢者に支えられている自治会活動

とは、他地域との比較でとらえるものではなく、ありたい姿を考え、取り組みこ

る。もちろん、新興の住宅地や賃貸の集合住宅では自治会が機能していないところもある。とはいえ、まだ一定の役割を果たしている地域も多い。そのような自治会活動を支えているのは誰なのだろうか。

「あなたはこの1年で町内会（自治会）活動を行いましたか」という質問に対して、約62％が「行っていない」と回答した。しかし逆にいえば3分の1以上が何らかの形でかかわっているともいえる。そこで年齢階層別の活動状況を見ると、Chart1のような結果となった。

「機会があるときは必ず行っている」という積極的な回答者は全回答者の6％強しかないが、その中で60歳以上の人が占める割合が半数近く（46・2％）になっている。全回答者に占める60歳以上回

その2 SNSにみる世代ギャップ

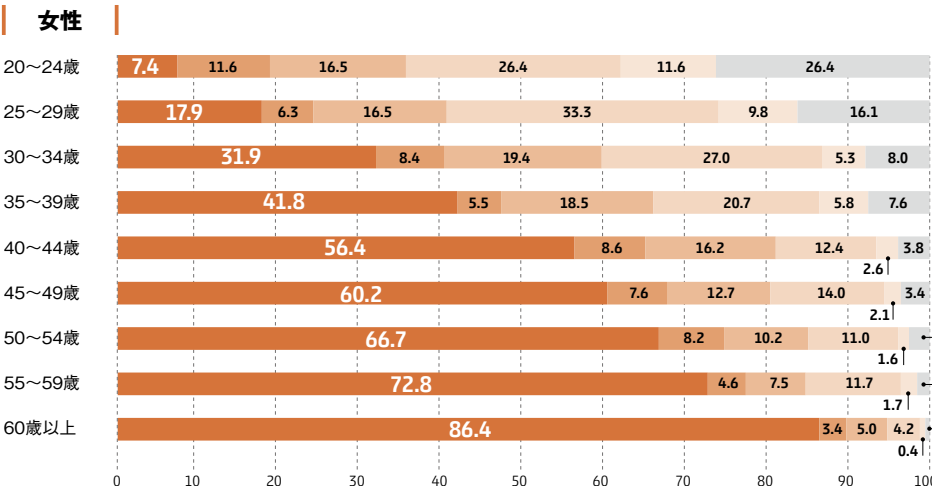
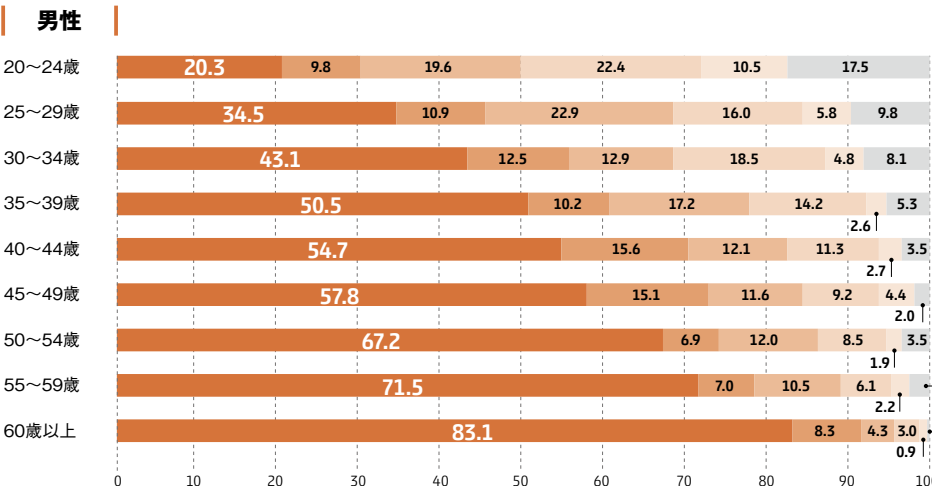
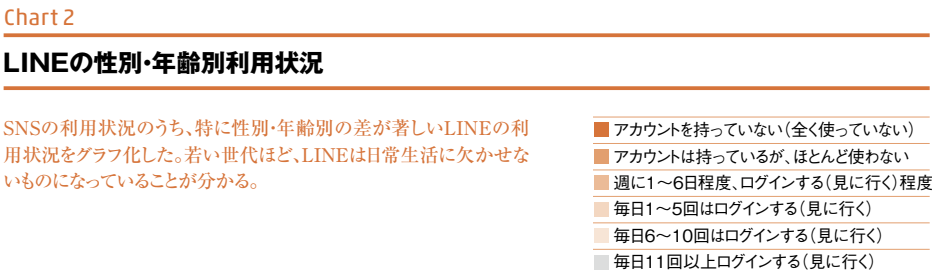
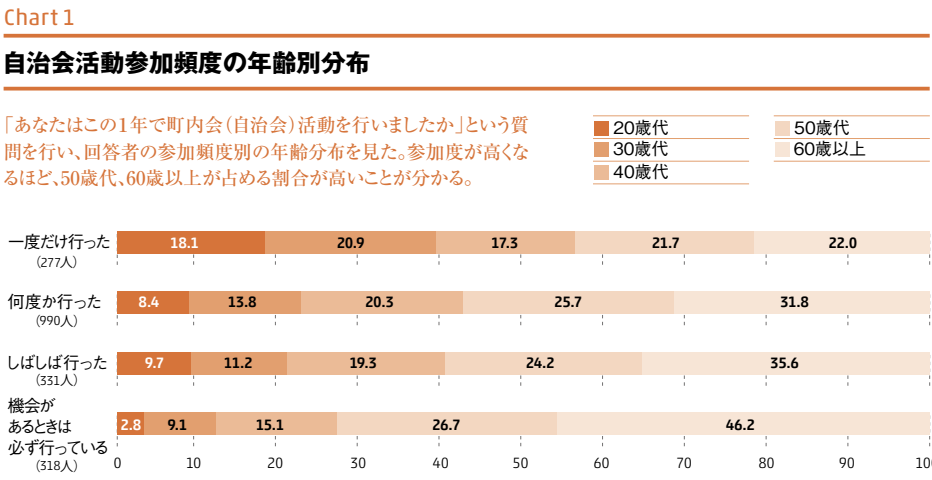
では交流の場や手段はどのように変化しているのだろうか。すぐに思い

ト上の交流は、場合によってはそれがきっかけで地元の同窓会が開かれるなど、実際の対面にもつながっている。LINEなどは若者を中心に、実生活と不可分になっているケースも多い。その意味では、地域の幸せを考えるに

ころ、年齢、性別で極端な違いが見られた。特に顕著であったLINEについて表したのがChart2である。「アカウントを持っていない（全く使っていない）」20歳代前半の男性は5人に1人しかいないのに対し、60歳以上の男性では7人中6人程度が該当する。より極端なのが女性で、20歳代前半の女性にLINEのアカウントを持っていない

のはわずか7・4％、一方60歳以上の女性では86・4％である。

利用頻度の違いにも驚かされる。20歳代前半の女性は「毎日11回以上ログインする（見に行く）」を選択した回答者が最も多く26・4％、4人に1人以上が該当する。こうなることはや日常生活にかけがえのない道具となっているといっても過言ではないだろう。



※Chart 1～5は表章単位未満を四捨五入している。そのため、合計値の計は必ずしも100ではない。

このような利用方法が今後、高年齢層にも広がっていくのか、ジェネレーションギャップとしてこの状況が維持されるのかは、地域の幸せということを展望する際の考慮事項としても大変興味深い。

その3 幸せな地域イメージには距離感が重要

人は様々なレベルで自分と地域を結び付けている。状況に応じて、例えば自らを神戸市民ととらえることもあれば、兵庫県民、日本人、アジア人という形で意識をすることもある。一方で範囲が広くなるほど、その地域全体の情報を知っている程度は低く、町内のことはいろいろと知っている（つもり）だが、市内だと知らないことも多い。県内ならなおさらというように。

当然、個人の意識の中でも「その地域」のことを知っているという思いは、範囲が広くなるにつれて希薄になっていくだろう。では個人は「地域の幸せ」をどう評価しているのだろうか。本調査では自分自身の幸せの他に、「周りに住んでいる人々」「住んでいる市区町村の人々」「住んでいる都道府県の人々」の幸福の水準イメージを尋ねている。その結果がChart 3にある。

予想通り、地域の範囲が広がるにつ

人の所得の帰属に対する意識に強く影響されるだろう。

それについて考察を行うため、所得に対する意識と格差に対する意識の関係を見た。まず「個人の所得は周囲の人々のおかげであって、自分だけのものではない」という質問を行った結果がChart 4である。過半数の回答者が周囲からのサポートを意識していることが分かる。

この回答と「社会の格差が広がって階層化しつつある」「現在の社会は格差が拡大しすぎて個人の尊厳を確保することができない」という質問結果との関係を見た（紙幅の都合で詳細な結果は省略する）。それによると、格差が広がっている、尊厳が確保できていないという意見を持つ人ほど、個人の所得は周囲のおかげと回答する、非常に強い傾向が確認された。やはり、所得の社会性、公共性を意識するほど、それが偏った配分になっているという考えが強くなるのであろう。同じ現象を見ても、それをどう感じるかは、背景にある価値意識に影響されることを示している。

その5 幸せな地域・成熟社会とは

生活者は地域の発展に対してどのような展望を持っているのであろうか。

れて「どちらともいえない」が増え、それ以外の選択肢が減っていく、あるいはフラットになる傾向が見られる（どちらかといえば幸福ではない）を除く）。この「どちらともいえない」は、いろいろあつて判断が難しいというよりは、よく分からないに近いのだろう。この4問の相関係数を見ると、個人の幸福度との相関は、エリアが広がるにつれ、0・58↓0・49↓0・47と徐々に減少していく。「地域の幸せ」と何気なく言ってしまうがちであるが、その地域とはどこまでを指すのかという定義を、考察するテーマごとに明確にしないと意味のないものになりかねない。注意が必要である。

その4 おかげさま意識と格差意識はつながっている

社会的な格差の拡大が指摘されて久しい。近年、非正規雇用の増加や高齢者の貧困問題、多様な家庭環境の問題とともにそれが一層深刻化しているとの声がある。もしそれを是正すべきであるならば、経済成長とともに自然に問題が解消するということは期待できず、何らかの「政策」の実施が必要である。そのような政策は所得再分配につながるという意味で、国民の合意が必要になる。同意するかどうかは、個

発展⇨幸福・成熟ではないし、そもそも地域の発展の定義は様々な可能性がある。しかし発展が地域の幸福の一要素として重要であることに間違いはないだろう。そこで自分の住んでいる地域は「政策的な支援なしでも発展していける」「政策的な支援があれば発展していける」「政策的な支援があっても発展しそうにない」という質問を行った。結果はChart 5に示している。

これを都道府県単位で見ると、支援なしでも発展できるという自信度の高かったのは東京都、神奈川県、愛知県、埼玉県、福岡県の順番であった。支援があれば発展できると答えた上位県は、沖縄県、滋賀県、富山県、京都府、石川県の順番であった。支援があっても発展しそうにないと回答した上位県は、山梨県、徳島県、福島県、秋田県、長崎県の順番であった。

回答結果を見ると、「発展」のイメージが経済的豊かさ強く結びついているということが分かる。もちろん経済面は重要であるが、安全・安心、健康、コミュニティ（絆）、落ち着きなど、生活の質を高める要素は他にもいろいろある。経済だけにとらわれず、より幅広く「発展」のイメージを広げていくことが、地域独自の価値を見つけることになる。ひいてはそれが今回のテーマである地域の幸福や成熟した社会につながるしていくと考える。

Chart 4

所得の帰属に対する意識について

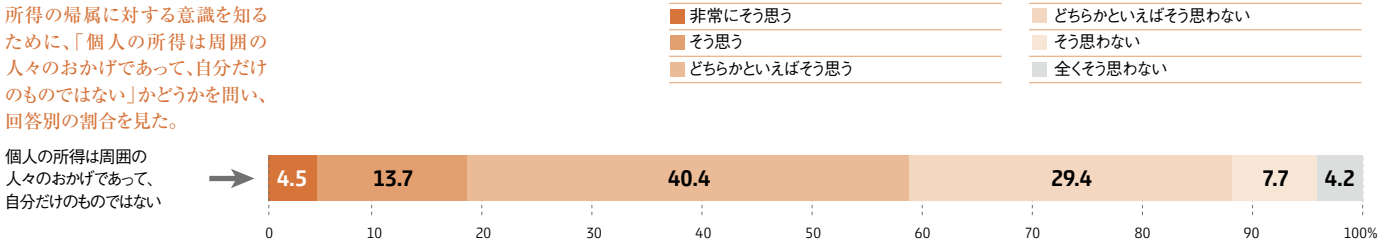


Chart 5

地域の発展に対する展望

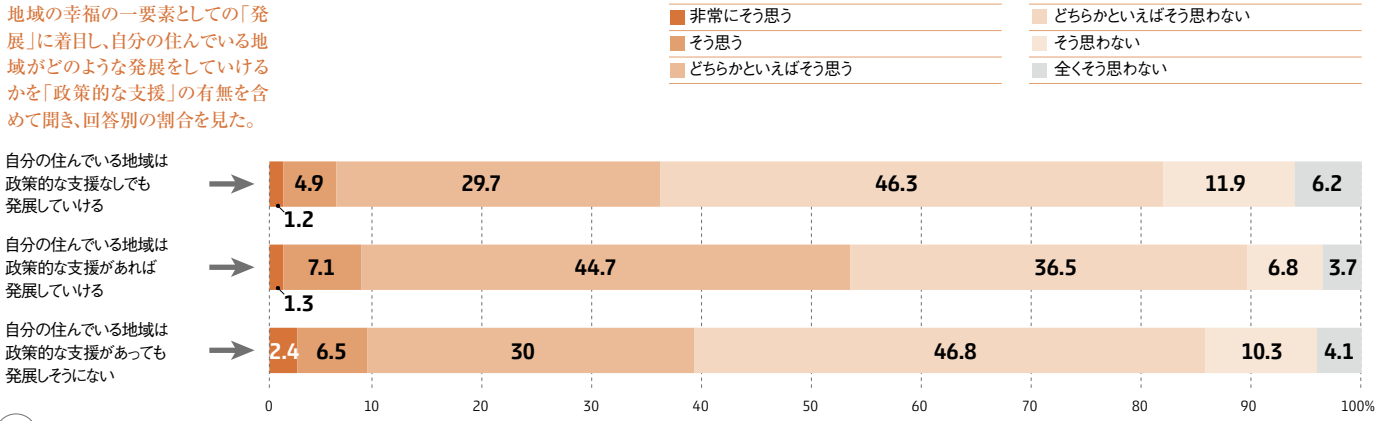
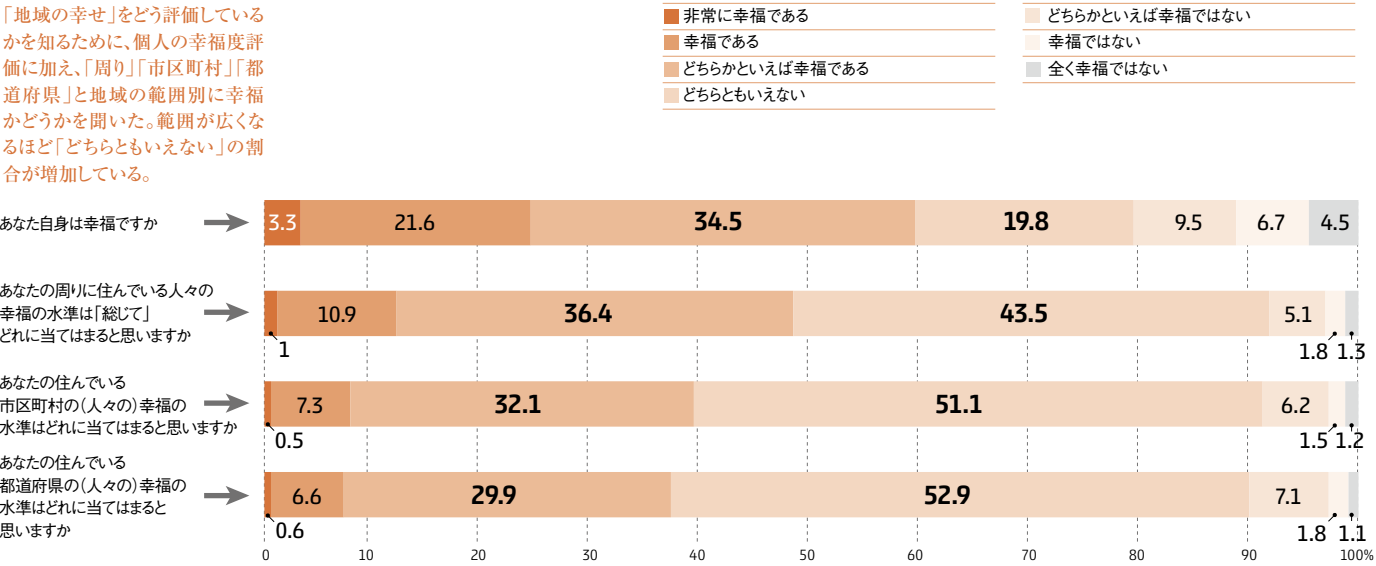


Chart 3

地域別の幸福水準



昔の学びを未来につなげる

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所
所長

小西池 透

Konishiike Tooru

「昔はよかったなあ」――。人生の経験を積み重ねた諸先輩方が時に口にするあのセリフ。これを、時代の流れについていけない自らに対する嘆きの表れだと思っている人たちも多いのでは？ ところがそれは大きな間違い。“昔”に学ぶべきことがどれほど多いことか、そのことを今号の編集を通じてあらためて認識することができました。

何よりも昔の暮らしには、その時々 of 厳しい時代を生き抜いてきた「生活と結びついた逞しい知恵」があります。暮らしのベースとなる街並みや路地には、豊かに生きていこうという切なる願いや、コミュニティを大切にする工夫がありました。伝統芸能には、いわゆるしきたりや作法がつきものですが、「どうしてこんな面倒くさいことを」と思われる所作のなかにも、合理的で無駄のない動きが息づいています。そして市民思想として広まった心学は、「先も立ち、我も立つ」という共生の倫理を説き、それは地域社会や企業が掲げる理念として現代でも十分に通用します。

「変革に向けての飽くなきチャレンジ」にも学ぶべき多くの示唆があります。300年以上も続く老舗企業の歴史は、実はたゆまぬ変革の積み重ねでした。続けることは自らを変えていくこと、そして新しいものを常に創造していくことであるという考え方は、今も企業経営の根幹であります。

「次代を担う人材を育てること」、これこそ私たちが最も学ぶべきことかもしれません。能楽に見られる、個々人の目標達成状況に合わせた育成手法、促成栽培ではなく長期的な視点で育てていこうという息の長い取り組みは、教育界や産業界が是非とも実践すべきではないでしょうか。

“昔”という言葉には、「いにしえ」に「むかう」という意味があると言われています。この言葉の意味を、「向うのは過去だけではなく未来にも」と捉えれば、“昔”は未来へ向うスタート地点だと言えます。前号では未来のスマート社会を展望しましたが、まさにスマートの原点が“昔”にはあるのです。そうした“昔”の知恵や教えを確実に伝えていくことが、私たち現代人の大きな責務だということを、今一度肝に銘じたいと思います。

Culture,
Energy
&
Life

CEL

Volume 112 March 2016

特集／昔の暮らし力
平成28(2016)年3月1日発行
頒価／1,000円(送料別途)

発行人

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人

小西池 透

企画・制作

奥田 浩二

編集人

湯原 公浩

編集

(株)平凡社

アートディレクション&デザイン

岡本一宣デザイン事務所

校正

(株)アンデバンダン

DTP制作

(有)ダイワコムズ

印刷・製本

(株)東京印書館

お問い合わせ窓口

大阪ガスビジネスクリエイト(株)
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for
Culture, Energy and Life
©2016 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写 ※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容は、インターネットホームページでご覧になれます。

CELホームページ ↓ http://www.og-cel.jp/

端午の節供は、今や男の子

が元気に育つようにと、武者人形を飾り、鯉のぼりをあげて祝う日です。しかしながら、

かつて端午は女性の成長を祝う日でした。旧暦5月は古名では皋月さつき。この月、早乙女と呼ばれる田植えをする少女た

ちが稲の穀霊を迎えるため、菰こもを敷き詰めた納屋に籠って身を清めます。また、早乙女

以外の少女たちも衣食住に関わる作物などが実る力・技術を神からいただき、丈夫な子供が産めるように、とその成長を祈ったのです。

暦においての「端午」は「午うまの月の端はしめ」の午の日。旧暦5月は新暦では梅雨と重なります。「梅雨」は中国では「霪雨はげり」と表記される程、湿度の高さや霪かひの発生が人々を悩ませましたが、梅雨は秋の収穫にとって大切な恵みでもありました。そこで、常日頃、季節を愛でる習慣をもつ日本人は、「梅の実が熟す」頃として「霪」と同じ音をもつ「梅」の文字を充て、「ばいう」と呼び習わしてきました。季節を美しく捉える日本人は「霪」の文字を使うことを憚はばったのでしよう。

しかし、長雨は様々な湿病をもたらします。そこで中国の思想を取り入れてきた貴族社会では特にこの端午の正午に、薬効の高い生薬を求め、山へ分け入る「葉狩り」が行われました。五行思想では「午」の重なる日・時間は「火」の性質がより強くなると考えられ、水気の

日の国
ニッポンの
ことわり
理

第六回

文 井戸 理恵子



漢宮英泉「十二月の内 五月 くす玉」

菖蒲などでは、飾ったくす玉は、端午の節供に柱や簾にかけて邪気を祓った。

所蔵／国立国会図書館

備えるための端午の節供

多い時期において端午は特別な日とされたのです。こうして得た「端午の生薬」

のうち、最も重用されたのが菖蒲しょうぶです。ただ、ここでいう菖蒲は、華やかな花を咲かせるアヤメ科の花菖蒲や杜若かきつばたとは異なる植物で、黄色い筒状の花をつけるサトイモ科の植物です。その葉

は強い香りを放ち、尖った葉の形を剣に見立ててはさまざまな邪気を祓う力があると信じられていました。やがて、この魔除

けの草は「菖蒲」の音読みとしての「尚武しょうぶ」に通じることから、

武家社会になると、端午の節供においての供物として使われ、男の子の祝いの日として定着したのです。

さて、端午の生薬・菖蒲は今でも菖蒲湯としてお風呂に使われますが、この時期特有の生薬は他にもあります。たとえば、「梅雨」に縁のある梅の実。梅干、梅酒、黒梅など、疲労回復、抗酸化作用などさまざまな効用が認められ、各地で多様な伝統食として受け継がれる、日本人の食文化になくてはならないものです。また、漢方で十薬といわれるほど多くの効能をもつドクダミは、体内の水分量や皮膚の汗腺の調節をし、老廃物を取り除くなど、夏に最大限にその力を発揮します。

端午。この日摘んだ薬草で人々は火の力を取り込み、穢けがれた水の力を祓い、次の季節に身体を備えるのです。まさに旬の力を知り得た上での賢い養生法といえるでしょう。

いどりえこ／民俗情報工
学研究室。1964年、北海
道生まれ。多摩美術大
学非常勤講師。節供の会
「アエフコト」節供の賛
成をはじめ、伝統儀礼や
風習の意味を民俗学的に
解明し、今に具現化する
提案を行う。著書に『暦・
しきたり・エノコト』日
本人が大切にしたいう
つこい暮らしなど。



Special Feature
The
Power
of
Traditional
Life

